狼少女の夢日記 ～ぼくらはあの時同じ月を見ていたんだ～

三月時雨

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

普通の高校生、桐原正也（きりはらまさや）には最近悩みがあった。それは、毎晩夢の中で同じクラスの篠宮夕佳（しのみやゆうか）と一緒に化け物の出る森を彷徨うはめになっているのだ。一方、篠宮夕佳もいつも通りの生活を送っていた。ただ１つ、森の中を歩き回る夢を毎日見ることを除いては……。

自分と自分の友達との関係に悩む、そんな人の物語です。

目次

プロローグ、篠宮夕佳の迷子 1
第1話 1
5月29日夜、桐原正也の憂鬱
第2話 4
第3話 7
第4話 11
第5話 15
6月2日昼、篠宮夕佳の外界
第6話 19
第7話 22
第8話 26
第9話 30
第10話 34
6月5日夜、桐原正也の概観
第11話 37
第12話 40
第13話 44
第14話 47
第15話 50
6月7日昼、篠宮夕佳の擬装
第16話 53
第17話 56
第18話 59
第19話 62
第20話 65

6月22日夜、桐原正也の思案
第21話 69
第22話 73
第23話 77
第24話 81
第25話 85
第26話 88
第27話 92
第28話 95
第29話 98
第30話 102
6月24日昼、篠宮夕佳の下向
第31話 105
第32話 108
第33話 111
第34話 114
第35話 117
第36話 120
第37話 123
第38話 128
第39話 131
第40話 135
第41話 138

プロローグ、篠宮夕佳の迷子

第1話

この世界は広すぎる。勿論地球は大きい。人の一生の中で訪れる町よりも訪れない町の方が多い。そんなの当然。ただ、今わたしはそういうことを言いたいんじゃない。

例えば大都会の十字路にある大きな横断歩道を渡っているとする。縦横だけでなく斜めにも白い線で引かれた道があるのを想像して欲しい。信号が青になり待っていた人達が一斉に歩き出す。その時、信号を待っていた人は自分と同じ人が他に何人いたのか知らない。視界に現れた人がそれぞれどこから来てどこへ向かうのか知らない。それ以上に他の人が何を思って渡ってるのかなど絶対に知るはずなどない。そういうことを言いたいのだ。

この世界は広い。全てを見渡すことは出来ないし、かといって殻の中に籠るには周りにある物の力が強すぎる。きっとみんなはどちらかをきちんと選んでいるのだろうけど、結局わたしは中途半端な存在としてここにいるしかなかった。

わたしはどうしてこの世界にいるのか。どうしてこの世界に生きているのか。わたしという存在があるかどうかで誰かの人生に大きく影響するなんて思えない。それは

みんなと違ってわたしがどちらにも就いていないからなのだろう。
なら、どちらかに身を置けば楽になれるのか。……わたしは楽になりたい。悩みに満ちた毎日から解放されたい。そうすれば部屋の中で一人寂しくうずくまることも、急に胸を突き刺すような虚無感に襲われることもなくて済むのに。
けれど、この世界は広すぎる。片方に留まることは楽なことじゃなかった。みんなと同じことなんて出来なかった。でもわたしは楽になりたい。楽になりたいのだ。
なら、どうしたらいいの？
みんなと違っているだろうことが苦しい。違っているまま過ごしていくことが苦しい。でも、みんなと同じになろうとするのも苦しい。頑張った後に返って来る傷の痛みが苦しい。
わたしはどうしたらいいの？
どうしたら楽になれるの？
それは巨大な迷路の中で自分がどこにいるのかも分からないまま出口を探して当てもなく彷徨うことに似ていた。
わたしはどこにいるの？
どこに向かえばいいの？
そもそもどこかに向かうことが正しいの？

長い時間が経ってもわたしにはちっとも分からない。もう他の人に頼るしかない。心の中ではそのように結論づいていた。

ただ、そんな気持ちになっても、全てが上手く行く訳じゃない。

けれど、もうそれしか手段がなかった。

あぁ、どうか、お願いです。誰かわたしに教えて下さい。そして……。

5月29日夜、桐原正也の憂鬱

第2話

人は寝ている間、一晩に7つ程の夢を見るのだとどこかで読んだ気がする。

つまり、夢とは忘れるもの。それを見ている瞬間、それは夢として存在しているけど、過ぎてしまうとすぐに消滅してしまう。または現実とは交わらないもの。つまり、現実には普通干渉してこない。それが夢だと考えることも出来る。

ただ、夢によっては朝になっても朧げなどとは言えない鮮明であり続ける夢があったりする。夢の中で話した会話や風景が朝になっても頭の中にこびり付いているそれだ。

最近、ぼくは毎晩夢を見ている。というか、夢と言っていいのか当のぼくでさえ疑問を持ってしまうような代物にうなされている。まぁ、とりあえず「夢」としておくことにする。

その夢でぼくは毎晩同じ森を彷徨っている。ぼくは森を出たいと思いながら、出口を探している。そして、森の中には化け物が住んでいて、出くわす度に自力で退治しないといけないのだ。

え？　それくらいなら普通だって？　ぼくだってこれくらいなら許容範囲。

だけど、それだけじゃないんだ。だって……

「ちょっと、桐原君……！」

……え？

どうしたの、と言おうとした瞬間、ぼくの体が突如後ろに飛ばされ、何かに激突する。痛みを堪えながらゆっくりと正面に視線を向けると、そこにはたった今パンチをきめた姿勢のままぼくをじっと見ている黒い生き物がいた。

「いや、だから、ちょっとは前を見た方がいいって……」

ぼくの惨状をちらりと一瞥して声の主、篠宮さんは言う。篠宮さんもぼくのよりも小振りの剣を握って目の前にいる別の化け物と対峙していた。

正直、ぼくらがどうして一緒に森を彷徨い歩くはめになっているのかさっぱり分からない。しかも、その女の子が夢の中の架空の人物じゃなくて、優しくて周りの人からも好かれている同じクラスの篠宮さんというれっきとした実在している人なのだからもう訳が分からない。というか、自分で夢だと気付いている時点で末期症状のような気が……。

「……気付くならもう少し早く気付いて欲しいよ……」

ぼくは剣を右手で握ったまま左手で背中をさする。痛い。めちゃくちゃ痛い。頬をつねって痛いと感じたらそれは夢じゃないんだっていうお約束の話があるけど、絶対嘘だ。一生信じてやるもんか。

「しょうがないでしょ！　わたしはこっちで手一杯なの！　というか、前から言ってるけど、自分のことは自分で、他人のことはお互いなるべく干渉しないはずでしょ？」

視線をこちらに向けもせず篠宮さんは切り捨てる。

勿論、教室ではこんなんじゃない。いつも誰かと話していて楽しそうに笑っている。それでも、毎日晩を見る度に少しずつではあるが丸くなってはきているんだけど。

ぼくはもう一度剣を構え直す。それを見て化け物はニヤリと笑った。右手を振りかぶりながら突進してくる。ぼくは寸での所で避けて、剣を横に勢い良く振る。剣が何かを切り裂く感覚。急所は外れたようだが、魔物は一瞬よろめく。すかさずぼくは剣を魔物の心臓に突き刺した。

第3話

化け物は叫び声も上げず、さらさらと砂塵と化し、さっきまで化け物の体を構成していた体が粉のように小さな部分が風で舞ってぼくの顔に触れては風に流されていく。不思議とぼくの中に恐怖とか罪悪感とかはなかった。

ぼくは自然とほっと一息をする。今日は背中を強打しただけで済んだけど、もっとひどい怪我の時も稀だけどある。だから、何とか一人で倒せてよかったと思わずにはいられない。

ただ、残念なことにまだ終わってない。ぼくは倒した時の姿勢のままで少し呼吸を整える。目線を動かすと、いつも通り篠宮さん化け物相手に苦戦しているようだ。篠宮さんは剣を振るが化け物は体をひねり難なく避け、逆に篠宮さんに向けてこぶしを振る。空振りで体勢を崩した篠宮さんは避けようとするが避け切れず横腹に攻撃を食らう。

「篠宮さ……」

「助けなくていいから!! こっちはわたし一人で何とかするから!」

ぼくの行動を察して篠宮さんは痛みで顔を歪めながらも声を張り上げる。でも、そんなのかまうもんか。

　ぼくは剣のつかを強く握り直す。化け物はぼくの方など見向きもしない。気付いてないのだろう。化け物の後ろに回って剣を振り下ろした。背後からの攻撃ということもあって、今度は一撃だった。化け物はさっきみたいにまるで砂でできた像のように崩れていく。
「大丈夫？」
「だから、あんなのわたし一人でも倒せるんだから」
　篠宮さんは攻撃を受けた横腹を押さえながらそっぽを向く。
「今まで一人で倒せたことがない人がいえる言葉じゃないでしょ。化け物1人相手につき2人いるんだから2対1の方が効率的だし、リスクも低いでしょ？」
「随分な自信ね。もし、自分が怪我したらどうするの。前にそれで結果としてわたしより怪我したこともあったでしょ」
　たしかにあの時は注意力散漫のせいで攻撃を無防備に受け、その後頭をぶつけたけどさ……。
「その時は仕方がないかなぁ。そうだ、手当してあげるよ。どっか怪我した？」
「いい。手当してもらう箇所なんかない。それに、自分でも出来る」
「そうとも限らないでしょ。あ、でも今回は脇腹だけか……。じゃあ、必要ないか」
「何残念そうな顔してるのよ。まぁ、別に構わないけど・・・・」

「してないよ」
「ふぅん。でも分かってるだろうけど、桐原君なんかにお腹は見せないからね」
別に見たい訳ではないんだけど…。でもそのことを口にしたら余計色々と言われそうなので止めた。
けけど、強気の口調とは裏腹に篠宮さんは押さえている右手の力を強めた。
「大丈夫?」
「大丈夫。アザにはなってると思うけど‥‥」
「本当に?」
「本当だってば!」
篠宮さんはムキになって言う。仕方なくぼくは諦めておもむろに空を見上げた。森の木々はそこまで密集して生えておらず、また今ちょうどいる場所が森の中でポッカリ穴が空いたように木がなかったのだ。茜色に染まった空がまるで緑色の額縁に入られた丸い形をした絵みたいに見える。
そんな空の赤さにぼくは思わずため息をこぼす。今日も何も変わらないまま、変えられないまま終わってしまうのかとしみじみと感じさせられるくらい赤い。もう既に木々の枝の間から月が姿を現していた。今宵は半月。毎日少しずつ欠けては満ちていく。ぼくらを見ているように殆ど毎晩現れては消えていく月。薄く光り輝いている月

は今日も心なしかくたびれているように見えた。

第4話

ぼくがこの世界に放り込まれたのも、篠宮さんとこの森の中で初めて会ったのも2週間前の同じ夜だった。それからいろいろあってぼくらは行動を共にしている。毎晩ぼくは篠宮さんと一緒に彷徨う。その後、夜が明けて朝になると目を覚まして現実での一日を過ごす。それで日が沈んでベットの上で眠りに落ちると、ぼくは一面の緑に囲まれながら篠宮さんの側にいる。その繰り返し。

篠宮さんはぼくと顔を合わせまいとしているのか、そっぽを向いている。それは目の前に広がるずっと遠くまで続いている木々の果てを眺めているようでもあった。

空が暗くなるにつれて、月が一層輝きだす。篠宮さんは同じ姿勢のままでまだ横腹の辺りを押さえていた。

「傷、まだ痛むの」

「うん……。大丈夫……」

ずっと痛みが引かないせいか篠宮さんの口調が少し弱気だった。

「湿布とかあれば良かったんだけど……」

「持ってないでしょ?」

持ち運びしないといけないので、当然ぼくらの荷物は最小限の物しかなかった。
「うん……」
篠宮さんは残念そうにため息をした。
「あればなぁ。あれば少しは楽になったのに」
「あればね」
「うん、あれば……」
ここで、会話が途切れる。入ってたりしてないかと思ってぼくは自分の荷物の中を探ってみたが、やっぱりない。どちらかが怪我をする度に確認してしまうのだが、何も変化はない。荷物の中身と自分達の居場所を嘆くしかなかった。ここが家であれば、戸棚の引き出しを開ければ、そうでなくてもドラッグストアまで走れば手に入る代物のはずなのに、だ。
「……シャワー、浴びたいな…」
篠宮さんはポツリと呟いた。
「水の量最大限にしてこれでもかってくらい水使ってすっきりしたいなぁ…。はぁぁ、川は冷たいし、ゆっくり楽しめないし、川自体を見つけるのも大変だし……」
「ま、朝まで我慢しよ」
「今したいの！　朝になったら髪についた土ぼこりとかは全部なくなってるから意味な

いの！」

何気なく言っただけなのに怒られた。

「もぅ！　桐原君が変なこと言っちゃうから余計浴びたくなっちゃったでしょ。どうしてくれるの。ほら、特別なパワーみたいので何とかならないの」

何と無茶苦茶な……。何とかしてあげたいのは山々なんだけど…。ぼくも体中のほこりとか落としたいし。

「ぼくには無理だよ。特殊能力なんか持ってないし」

「そんなの、初めから分かってるよ！」

篠宮さんは苛立ったように吐き捨てた。ぼくは、はぁぁとため息をつく。

「……まぁ、ここを出るまで頑張ろう」

「分かってるよ……」

篠宮さんは拗ねた顔で言う。

「夢なんだから、出口はあるよ」

「桐原君に言われなくても、それくらいわたしだって知ってるよ。これは、夢」

「そう、夢」

「夢なんだからね」

「うん……」

また、ぼくらは話す言葉がなくなった。日が沈むにつれて、木々の葉が緑色を失って行く。
「…桐原君は、本当に魔法みたいなのは使えないの？」
「残念なことにね」
「わたしより化け物倒すの上手なのに？」
「上手でも」
「夢の中なのに？」
「夢だけど。持ってないものは持ってない」
「やっぱり、そっか……」
「夢だけどね」
「夢なのに。……出口、あるのかなぁ……」
篠宮さんは膝を曲げて体育座りの姿勢になって、そう小さく言った。

第5話

ぼくは篠宮さんを励まそうとして語りかける。
「あるよ。きっと」
「……それ、さっきも聞いた」
「うん、さっきも言った」
「でも、夢はご都合主義じゃないんだよ」
「大丈夫。いつか見つかるよ」
ぼくは楽観的な言葉を口にする。ぼくは心からそんなこと思ってはないけど、そう信じている方がぼくの、そしてそれ以上に篠宮さんにとって気が楽になるんじゃないかなと思ったからだ。
でも、こんなこと言ってまた篠宮さんがイライラした口調で言い返してきたりして……。
言ってからぼくはそんな心配をしたが、篠宮さんの口調は予想していたのとは違っていた。もっと哀しみの混ざった口調だった。
「いつかって、いつのこと?」

「いつかだよ」
　ぼくはとっさにそう返した。
「そんなの信じられないよ。今日も明日もその『いつか』じゃないかもしれないよ」
「だけど、明後日にはやって来るかもしれない」
「明後日も今日と明日と同じかもしれないよ」
「うん、そうだね……。いつまで続くと思う？」
「さぁ。そんなこと知ってる訳ないでしょ？　もし、知ってたら」
「知ってたら？」
「毎日指折りながら日にち数えてるよ」
　篠宮さんは自分のやり切れなさを吐き出すように言った。それはこの森を抜けられないのではということへの怯えなのかもしれないとぼくは思った。
　しかし、そんな篠宮さんのかよわげな姿はすぐに消え、篠宮さんはぼくを睨むように見た。
「何？　その顔。当然でしょ？　わたしはさっさとこの夢からも、桐原君と毎晩一緒にいなきゃいけないことからも解放されたいの。別におかしなことではないでしょ？」
「おかしなことだよ。だって、篠宮さんだって何だかんだでぼくと一緒にいることに同意して……」

「おかしくなんかないよ」

篠宮さんはぼくの言葉を遮り、早口で続けた。

「最初の夜に言ったでしょ？『桐原君と一緒に行動してもいいけど、それは単にわたし一人じゃ抜け出せそうにないからで、森を抜けれたら、その時は一緒にいるのを止めて別れるんだから』って。わたし達は一つの共通の目的があってただ利害が一致しているだけなの。わたし達は仲間じゃないの」

ぼくは返す言葉がなかった。いや、本当はあるはずなのだ。ただ、頭の中の隅のある場所に濃い霧がかかっていてはっきりと周りの景色が見えないのだ。手元の剣を振り回しても霧は晴れない。無駄な足掻きでしかない。しかも残念なことに、目の前の巨大な扇風機があるのだが、故障しているせいか動かないのだ。直す方法を知らないぼくはただ剣を振り回すしかなかった。

篠宮さんはおもむろに立ち上がり、「薪を取ってくる」、と言ってぼくに背を向けて歩き出した。いつもはぼくが薪を拾いその後火を付け、篠宮さんが食材を探しに行っていた。

もしかしたら、篠宮さんはこの場にいるのが気まずいのかもしれない。そう思っていると、篠宮さんは突然立ち止まり振り返らないまま、

「……本当のことを言うとね、桐原君には感謝しているんだよ。お互いのことは干渉し

ないことにするって言ってた人が言う言葉じゃないとは思うし、さっきはあんな風に言ってたんだけど……。でも、毎回毎回魔物が出た時に助けてくれたりくれてこれでも感謝はしてるんだよ。でも、それとこれとは違うの。感謝はしてるんだけど、わたし達は仲間じゃないの。それは、今もこの先も」

篠宮さんは一語一語ゆっくりと、まるで自分自身に言い聞かせるように言うと、そのまま薪を拾いに行ってしまった。

夕日の明かりはまもなく森の木々に隠れて消えてしまいそうだった。だんだんと視界が暗くなっていく。そうして完全に暗くなる前に、とぼくも食材を探しに行った。

6月2日昼、篠宮夕佳の外界

第6話

横断歩道前では同じ制服を着た青信号待ちの生徒がたむろしていた。どうして今日もっと早く起きれなかったのかとわたしは後悔する。

これだけ人がいると自分のペースで歩けない。ただでさえ、今日は家を出るのが遅れたせいで電車は混んでいて、ドア付近よりも奥に行けなかったし、座れないし、掴まる棒も近くにないし、おまけに吊り革は高くて届かなかったのに。電車の中で何にも掴まらずに過ごさないといけない苦労なんて背が頭一つ分くらい高かったりする男子陣にはきっと分からないだろう。やっぱり背が高いのは羨ましい。そんな背の小ささをカバーするために気休め程度だけどローファーの踵を高めにしているのも履き慣れているとはいえ、こういう時は疲れる。だから、駅から学校までの通学路くらい自分のペースで歩かせて欲しいと思うのだ。

目の前の人を見ながらわたしは仕方がないとは思いつつも邪魔だなとも思った。学校も苦情が来たとかでここの裏路地は通行禁止、とかこの信号を渡った後の左折は禁止、とか言って先生を立たせているけど、今のわたしは誰かと一緒にいる訳でもないか

ら幅も取らないし、話し声も五月蠅（うるさ）くなるはずもないのだから許してくれてもいいはずなのに…。

せめてもの救いは音楽再生機器で曲を聞きながら学校に登校出来ること。まぁ、通学路が混んでいなくても使ってはいるんだけど。わたしは音楽を聴いている時間は好きだった。楽しくて休み時間とかでも聴いたりしている。曲は今人気のバンドの最近出たばっかりの新曲。エレキギターが前面に出ていて、アップテンポな曲調をしている。好きなバンドではないのだけど、クラスの中では好きな人が結構いるからきっとクラスでの話のネタにでもなるだろう。そう思って聞いていると、

「夕佳！　おっはよ」

いきなり背中を叩かれてわたしは一瞬ビクッとする。叩かれる前にイアホン越しにかすかに子供らしさの少し残った高めの声が聞こえたとはいえ、驚いてしまう。

わたしは片耳のイアホンを外して振り返る。

「おはよう、しより」

「駅前で遠くに夕佳が見えたから早歩きで来ちゃった。学校に着く前に会うのってホント久しぶり。新年度初じゃない」

たしかに、最近はいつも一人で学校に行っていた。学年が一つ上がってから誰かと一緒に学校に行った記憶がない。

「そう、かもね」
「あ～ぁ、駅前で待ち合わせとかすれば毎朝一緒に行けるのに。やっぱりダメ？」
「ダメ。朝に弱くて家を出る時間が日によってマチマチだから。わたしには待ち合わせとかは無理だよ」
「そうやって毎回断れるんだよね～」
ほのみは残念そうに呟く。

第7話

「……なんか、ごめんね」
「うぅん、いいの。代わりと言っちゃ何だけど、英語の長文の訳見せてくれない？」
しよりは両手を合わせてお願いのポーズをする。
「別に、いいけど……。今日の1時間目って英語だっけ？」
「そうなんだよ！　しかも今日の日付はあたしの出席番号！　どう考えてもあたるでしょ」
「確かに……。学校着いたらでいい？」
「いいよ。よかった～」
しよりは胸を撫で下ろすと嬉しそうに頬を緩ませた。その顔を見れてわたしもついい良かったと思ってしまう。本人の学力のためには微塵にもならないけど。
「後もう1つお願いだけど、昼買っていい？」
道の先に見えるコンビニの看板を見て思い出したのかな？
「買ってなかったの？」
「夕佳を見かけて駅前の所で買うのをすっかり忘れたみたいで」

しよりは、ははは と小さく笑う。

コンビニの前に着くとしよりは「3分で済ませる」と言い残して駆け足で店の中に入っていった。ガラス製の自動ドア越しにレジに並ぶ列が見える。大半は学生服を着ていた。しよりが戻って来るまでしばらく掛かりそう……。買う必要のないわたしは店の外で戻って来るのを待つことにした。

通学路にもなっているこの国道は駅から1キロくらい先まで直線に伸びていて、ものすごいスピードで車が通り過ぎていく。学校は駅から国道を真っ直ぐ進み、途中で左に曲がってすぐの所にある。道の歩道を歩く同じ学校の生徒が遠くまで見えた。

わたしはキョロキョロと辺りを見回す。今が通学路を歩いている生徒の数が1番多い時間帯。そして、最近の学校に着く時間から逆算するとか今頃「彼」が駅の改札を出てこちらに向かっているはず。もし、わたし達に追いついたら……。

けれど、しばらくするとしよりがコンビニから出て来た。時計は見ていなかったから3分以内かどうかは分からない。ただ、しよりを待っている間「彼」の姿は見えなかった。

「お待たせ。行こっか」

わたし達はまた並んで歩き出す。コンビニのレジ袋が時々しよりの体に当たってカシャカシャと音を出す。

「何買ったの？」
「ん？　パン1個にサラダ。それとおやつ。新発売なんだって。学校で一緒に食べよ」
　しよりが袋から出して見せたのは表面にチョコがコーティングされたクッキーだった。パッケージは箱形で紙で出来ていいた。中で個別に包装されているのだろう。
「いいの？　もらうもらう。やっぱ甘味はいいよね」
「もうずっと食べてたい。3食甘くてもいい。ホテルのデザートビュッフェは憧れるなぁ」
　しよりの目はうっとりとする。
「いいよね。わたしももう食べれないって思えるくらい食べてみたい。でも、昼そんなに少なくて大丈夫なの？　運動部でしょ？」
「ただいまダイエット中。もうしばらく体重計は見たくない……」
「それでも、甘い物は食べるんだ」
「だ、だって食べたくなるじゃん」
　痛い所を突かれたのか、しよりは顔を赤くして弁解する。
「それに、食べた分は部活頑張ればいいから」
「いつもより余計に走って？」
「走ると結構いい運動になるよ」

「わたしも運動しよっかな……」
　わたしは昨日の体重計の数値を思い出してみる。最近体重は減っているものの、運動はしておいた方がいいだろう。このまま体力がないのも困る。
「夕佳は大丈夫だよ。運動部でもないのにスタイル抜群だし」
「そんなことないってば。最近ストレスで痩せてきてるだけだから」
　わたしがそう言うと、しよりは伺うようにわたしを見てきた。
「ストレスって？」
「……まぁ、いろいろと」
　言うのがはばかられてわたしはお茶を濁す。しよりも聞くのを諦め、わたしを見るのを止めてまた正面を向いた。

第8話

「そうだよね……。部活とか、ヤになっちゃうことってあるもんね。あたしの所だって、1年が生意気でイラッとするんだけど」
「部活の後輩が？」
「そう。ハードルを片付けないわ、ストップウォッチで他の子のタイムを計らず遊んでるわでホント何とかして欲しいんだよね」
　部活での出来事を思い出してかしよりはイラだった調子で言う。心なしかしよりのローファーが地面を蹴る音が荒々しかった。
「大変そうだね」
「それはどこの部活も同じでしょ。夕佳も美術部大変なんじゃないの？」
　しよりはそういう風に言うが、そんなことはなかった。わたしの所属する美術部はよく言えば自由でマイペース、悪く言えば個人主義で協調性のない部だった。部活の曜日は決まっているが、全員が揃ったためしがない。わたしはきちんと毎回行っているが、もう1ヶ月近く来ていない部員もいる。行っても作品を作っている部員がいたり、他の部員と楽しく話している部員がいたりとやることは人それぞれ。作品に打ち込んでい

る側が話している側にうるさいと言うこともなく、話すのを止めて何かつくりなさいと促すこともない。そんな部活なのだ。

「しよりの陸上部に比べたらぜんぜん。先輩後輩間の接点があまりないし、今大変なのはコンクールに出す作品の制作だけど、それはしよりが大会に向けて練習するのとおんなじだから」

「コンクールかぁ。調子はどう?」

「ぼちぼちってところ。下書きが今月の終わりまでなんだけど、まだ思いついてなくて……」

「ガンバ」

「でも、しよりと比べたら全然楽だよ。部活で気に病むこともないし、休みも多いし。……ところで、週末のことなんだけど、沙菜(さな)は来れそう?」

沙菜というのはわたしとしよりの中学校時の知り合いである。よく3人で放課後に寄り道したり休日に遊んだりした。海に行ったこともある。それくらい親しかった。高校が別になってからはそういうことも随分なくなったが今でもしよりを中心に時々会わないかという話になるのだ。

わたしが尋ねるとしよりは残念そうな顔をする。

「……無理みたい。急に部活の練習が入っちゃったみたいで……」

「ひさびさに会えると思ったのに。前回はわたしは行けなかったし」
「あれ、そうだっけ？」
「家の用事で。たしかその時しよりは結局沙菜と２人で遊んだはずだよ」
「あぁ、そうだった。じゃあ、夕佳って卒業式以来一度も会えてないってこと？」
「そんなことはないんだけど、高校に入学する前が最後なの……」
　春休みや冬休みはお互いの都合がつかず、文化祭は開催日がまったく同じになり、夏休みは会う計画を立てたがわたしは会えずじまい。ここまでさかのぼるともう高校の入学式と中学の卒業式は目と鼻の先。思えば、わたしが１年の時に同じクラスだったのが沙菜で、しよりと知り合ったのは２年になってからだった。だから中学の時、しよりとよりもわたしは沙菜と仲が良かった。でも、気付かぬ内に学校帰りに駅前のスーパーの小物用品店に立ち寄り、そこで笑い合った日々は過去のものになっていた。あの頃が遠くに行ってしまったのかと思うと何だか切ない。
　今回は長期休暇以外の日も視野にいれたら会えるんじゃないかってしよりが計画してくれたのに……。
「そっか……。そういえば沙菜が言ってたよ。『夕佳もたまには連絡してよ～』だって」
「う～ん、時々連絡しようかなとは思うけど、沙菜が今忙しそうだったらって思うとつい……」

「何遠慮しいてるの！　沙菜だって寂しがってるんだから」
「そういうもんかな」
「そういうもんなの」
しよりは力強く言う。まるでそれ以外はあり得ないと言っているようだった。

第9話

「そういうもんなのか……そうだね。連絡してみるよ」
「そうしてあげて。きっと喜ぶから。でも週末はどうする？　２人だけでも遊ぶ？」
「仕方がないね。沙菜とはまた今度会えばいいし」
今度っていつなんだと自分でも突っ込みたくなる。インクの赤色は色あせやすいという話をどこかで聞いたことがある。大事に大事に思い出を仕舞ったアルバムも毎日太陽の光に当てられてちょっとずつ色あせていく。そしていつか昔を懐かしんでアルバムを開いた時には写真の赤色はもう赤色でなくなっているのだろうか。最初の時にどのくらい赤かったのか思い出す術もなくしてしまって……。
歩く速度が遅いせいで、横を歩く生徒がわたし達を追い抜いていく。
みんな歩くの速いよなぁ。
誰かと話ながらだからそりゃそうだけどと思っていたところ、わたしは一人の生徒が視界に入ってきてドキッとした。
桐原君だ……。
桐原君は車道を挟んだ向かい側の歩道を歩いている。うつむきがちで横を見もしな

い。わたし達には気付いていないようだった。
「あ、あそこに桐原君がいる」
目ざといしよりはわたしにそう囁いた。
「……どこに？」
「ちょうど真横だよ。反対側の歩道の」
「見つからないよ」
「ほら、今薬局の立て看板を通り過ぎたリュックをしょってる」
「……あぁ、いるね。だけど、そろそろ急がないと。学校に間に合わないよ」
「そう？　まだ大丈夫だよ」
「でも、急ぐにこしたことはないから。それに遅刻は一度もしたくないし。急ごう、しより」
わたしは早口で言うと、しよりの腕を掴んでグイグイと引っ張る。
「ねぇ、夕佳ってば！」
しよりが何か言いたがってそうだがわたしは構わず引っ張り続ける。追い抜かれる身だったのが追い抜く身に。駆け足気味でそのまま学校に行き、教室の入口の扉を開ける。いつもなら15分はかかる駅からの道のりがコンビニでの待ち時間を入れても今日は3分速かった。

「しより、おはよ。それに夕佳も」
「うん、おはよ」
　わたしは笑顔で挨拶した。
「おはよ～、夕佳ちゃん」
「夕佳としよりんだ。おはよう。どうしの。2人とも息を切らして」
「え？　うぅんと、学校に遅刻しちゃいそうだったから」
　わたしはえへへと笑う。そしてようやくしよりの手を離した。しよりはそのことに何も言わず黙っていた。
「まだ後7分はあるよ。マジメだよね～」
「ホント、マジメ。遅刻くらいしちゃっても別にいいのに」
「…ま、まあね」
「夕佳って「ザ・優等生」って感じだもんね」
「優等生じゃないってば」
「雰囲気がまずそうなの」
「それね。昨日返ってきた英語はクラス1位だったんでしょ？」
「そうだけど……」
「ほら、やっぱり優等生じゃん」

「だよねぇ」

　そんなたわいもない会話がしばらく続いた。ケラケラと笑い合える、心が落ち着く時間。ただ、しよりは仏頂面のままだった。一通り終わった頃、1人の女の子がそのことに気付いて言った。

「あれ、しよりはさっきから何でずっと黙っているの？　しかも考え込んだ顔しちゃって」

「あ、いや……1限の英語の和訳どうしようかかなって」

　しよりの言葉にわたしは、はたと思い出して、肩にかけた鞄のファスナーを開いてノートを取り出す。

「ごめんごめん、忘れてた。はい、ノート。授業始る前に返してね」

「うん、ありがと……」

　しよりは歯切れの悪い口調で言うと、わたしのノートを持って自分の席についてしまった。

第10話

その一部始終を周りの女子は怪しんで、わたしに言った。
「何かあやし～」
「口ではそう言ってるけど、本当は何かあったんじゃないの？」
「例えば、夕佳ちゃんがしよりちゃんにいじわるしたとか」
「夕佳も独り占めしたいからって、しよりを拘束しちゃダメだよ」
「もう、そんなことしないってば」
わたしは笑って誤摩化す。周りの女子はただじゃれ合っているだけのつもりなのだが、これ以上一緒に話していたら根掘り葉掘り聞かれそうだったので、話を無理矢理打ち切ってわたしも自分の席の所に行き、鞄を机に置いて椅子にストンと座る。それをしよりが心配そうな顔つきで見ていた。一瞬しよりと目が合う。わたしはすぐさま目をそらした。
授業前の教室はガヤガヤしている。わたしはしよりのことを意識しないように鞄から教科書を出して机の中に仕舞う動作をする。けれども、気になってしまう。ちらっとしよりを見ると、しよりは机に向かってノートにわたしの和訳を写していた。安心して

わたしはまた教科書を仕舞い出したのだが、目を離すとしよりがわたしを見ているような気がして、わたしはしよりを見ては教科書を仕舞うのを繰り返した。

それを何十回続けてもまだ気になってしまい、わたしは我慢出来なくなって席を立ち教室の外へ出ようと決める。小さめな歩幅で歩いていき、わたしは教室の開けられたままのドアのレールをまたごうとした。

すると、不幸にも一番したくない人と鉢合わせになった。

あ、桐原君……。

わたしは平然を装って笑顔を作ってみせる

「おはよう、桐原君」

わたしはそれだけ言うと返事を待たずに桐原君の横を通り過ぎる。ただ、何歩か歩いた所で今度は桐原君のことが気になり、わたしは思わず振り返る。桐原君はすでに自分の座る席のすぐ側まで歩いてきていた。桐原君の席はしよりの席の隣。しよりはまだ和訳を写していた。やがて、桐原君が席につく。しよりは桐原君をちらりと見ると、口を開いて何か言おうとした。何を言うのか、わたしはつい聞き耳をする。

教室の外からだったため、聞こえづらかったが、2人の会話はこんなのであった。

「おはよう、桐原君。後でちょっといい?」

「いいけど、どうしたの。浅野さん?」

「少し聞きたいことが……」

会話はここまでだった。しよりはまた和訳を写し出す。

何なんだろう？　しよりと桐原君にはあんまり接点がないのに。しよりは何を言いたいんだろう。しよりと桐原君が話したら、どんな話題になるんだろう……。桐原君がしよりに余計なことを言わなければいいんだけど……。

わたしはそんなことを思いつつ教室を後にした。

6月5日夜、桐原正也の概観

第11話

「ねえ、本当にこっちで合ってるの？」
「大丈夫、合ってるよ」
　篠宮さんは自信たっぷりに答える。
「登ってるつもりでも実は降りてましたみたいな疑いはないの？」
「ぜんぜん。仮にそうだとしても、わたしはこっちに出口がある気がするの。わたしの勘は結構間違わないと思うよ。山を越えた先にあるなとわたしの勘が言ってれば出口はそこにあるとし、山を登ってるんだと言ってれば絶対に下ったりしてないはずだよ。……多分」
　最後の一言は聞き捨てならないんだけど……。
「本当なのかなぁ」
「信じてくれないんだ。いいよ。じゃあ、わたしについて来なくていいから」
　篠宮さんはへそを曲げる。
「分かった、分かった。信じる。信じるから」

正直、信用はしきれないけど、ぼくだってわらにもすがる思いなのだ。
「いいよ、信じなくて」
「だから信じるって」
篠宮さんが完全に拗ねてしまってぼくはやっちゃったとため息をつく。こうなったらしばらくは機嫌が元に戻らないだろう。
たしかに、篠宮さんの勘に頼り続けた結果、襲って来る化け物に変化があったのは事実だった。最初の頃は動物のように吠えたりすることくらいしか出来なかったが、最近は片言ではあるが、人間の言葉を喋れるようになってきている。それを人は進歩というのだが、ゲームのようにダンジョンの後半にいく程敵が強くなっているのだとしたら、篠宮さんの勘は正しいことにある。いずれにしろ、篠宮さんの勘が見当違いな方向へと導いてないとことを祈るばかりである。
「はぁ、歩き疲れた……」
篠宮さんの息は不規則に乱れていた。
「なら、ここで少し休む?」
「いい！　わたしはさっさとこの森を抜けたいの！」
結構根に持っているようで、篠宮さんはムキになって歩くペースを速めた。
「ちょっと、待ってよ」

本当はぼくもここら辺で休みたかったんだけど……。篠宮さんを追いかけぼくも早歩きになる。

ぼくらは木々の隙間を縫うように進んでいった。地面には落ち葉が溜まっていて一歩脚を前に出す度にしゃりしゃりと音がした。

森の中は薄暗く、所々に差し込む木漏れ日が眩しく感じた。その度に見上げると青い空がいつもあった。

生い茂る木々が視界の横を流れていく。木はどれも似たり寄ったりでこの世界の森はどこか殺風景だった。現実世界のもそうなのだろうか。

ぼくはそんなことを思っていると視界の隅に黒い物が写った。

「ふせて!」

ぼくは鋭く叫んで膝を地面につけて体を小さくする。篠宮さんもぼくに続いてふせた。土は湿っていて冷たかった。

第12話

「どこ?」
「左の奥に一人」
　ぼくは周りに響かないように低い声で告げて、腰に差した剣に手をそっとそえる。
「何で、夢の中で毎晩こんな目に会わないといけないの!」
　篠宮さんは小さく苛立ちにも似た声を上げる。
「それは、ぼくに言われても……」
「桐原君には言ってない!　この夢に言ってるの。だいたい、何なの。あの黒いのは!
　結構トラウマなんだけど」
「時として夢は理不尽な物だから」
「悟ったように言わないでよ。桐原君はいいじゃん。あの黒のペンキを塗られた人みたいなよく分からない者を一人で倒せるんだし。それと違ってわたしは……」
　篠宮さんの声が小さくなっていって最後は何を言っているのかはっきりとは聞き取れなかった。でも、ぼくには「わたしは本当にあれが怖いの」と言っていたように聞こ

えた。
「大丈夫。ここは任せて」
「君の命はこのぼくに預けろみたいな台詞、桐原君には十年早い。実際、任せるしかないんだけど……」
言葉はどうであれ、勘違いかもしれないがぼくはこの時篠宮さんに頼られた気がした。
ぼくは息を殺して左を観察する。こっちに来るのだろうか。そのまま通り過ぎるだけなら問題ないんだけど、もしこっちに近付いてきたら……。そしたら、ぼくが守らないと。
って、あれ？
その黒い何かは全く通り過ぎる気配もなく、かといってぼくらに近寄って来る気配もない。というか微動だにせず固まってるんだけど……。
「……桐原君、あれってただの若木じゃない？」
「えっ？　うっそ」
篠宮さんに指摘されてぼくはじっと目を凝らす。
「あ……、ホントだ」
ぼくは守らないとと思っていた自分が恥ずかしくなる。ぼくが見間違えたのはまだ

人の背丈くらいしかない若木で影で黒く見えてみたいだった。
篠宮さんはため息をつく。そして立ち上がり、土を払い落としまた歩き出した。
「あ～あ、とんだ無駄骨だったじゃない。これじゃ、わたしの勘がどうだこうだなんて言えないね」
ぼくには言い返せる言葉もなかった。
その後お互い無言だったが、歩き出してしばらく経った頃に突如片側の木々が切り取られたように視界の開けた場所に行き着いた。そこからぼくらのいる山の裾や向こう連なる山々が望められた。
「ほらね。ちゃんと登ってきてる」
篠宮さんはえへんと胸を張る。
「まぁ、このまま勘が冴え続ければいいんだけど」
「ん？　何か言った？」
篠宮さんはぼくをじろりと睨んで来る。
「い～え、別に。ところでさ、ここでちょっと休まない？」
「ヤダ。って言いたい所だけどわたしも疲れちゃった」
篠宮さんはペタンと地面に座ると四肢を投げ出して仰向けに寝転がる。
「寝る。十分経ったら起こして」

「え？　寝るの？」
　ぼくはぎょっとする。夢の中なのに昼寝なんて出来るの？
「うん。あ、言っておくけど、わたしが寝てる間にいなくなっちゃおうなんて絶対に思わないでね。わたしも、桐原君が寝てる間には、そんなことしないから」
「する訳ないじゃん」
「でも、もし化け物が出て来たらわたしのことなんか考えないで一目散に逃げてもいいから」
「そうだったとしても、逃げる前に起こしてあげるよ」
「……じゃあ……そう…して……」
　篠宮さんはまどろみながらそう言うと目を閉じ、スースーと寝息を立てる。夢の世界で寝るとまた別の世界に行くのだろうか。というか、十分って言っても時計がないんだけど……。
　まぁ、適当なタイミングで篠宮さんを起こせばいいかと思ってぼくは両足を前に伸ばす。

第13話

ザァァァ……。

風が吹き木々を揺らしながら森の中を抜けていった。汗をかいた体に風がぶつかって気持ちよい。

視界の先に広がる緑はずっと遠くまで続いている。最初にいたのがどこらへんかは分からないが、もう随分と歩いてきたのだろう。その上の空を大小さまざまの雲が横切っていく。

ぼくは手を地面につく。すると、カシャリと森の中には似つかわしくない音がした。見るとそれはお菓子を包装していた小さなプラスチックであった。

そう言えば、ぼくらが森を歩いていくにつれて変化してきたものがもう一つあった。それがこのゴミなのだ。進むに連れてゴミの数は増え、また大きな物も目につくようになった。捨ててあるのも様々でゴミから可愛らしい小物や教室の椅子、果ては電車の吊り革みたいなよく分からない物まであった。ぼくはプラスチックを手にとって見ながらどうしてこれがあるのだろうと思った。現実世界の山では最近ゴミ捨てや不法投棄に悩まされている所も多いと聞くが、ここには人の姿はおろか、住んでいる気配すらな

い。

風が強く、見えていた雲があっという間に木の葉の間に消えてしまう。けれど、きっと見えなくなっても雲は相変わらずどこかへ流されていくのだろう。

「一体ここは何なんだろう……」

夢というには感覚がリアルすぎる。それに昼の学校の記憶だって朧げながら残ってるし、そもそも2人が全く同じ夢を見るなんてこと聞いたこともない。

何かによって作られた場所であることは間違いないだろう。考えられるのは3つ。篠宮さんかぼくか、はたまた天地創造の主を含むぼくらではない第三者かだ。しかしぼくにはどれが正しいのだという確信もなければ、決定的な証拠もない。

けれど、この一面の緑を見ている内に、このずっと先にぼくらが暮す現実世界の街並みが見えてくるような気がした。それはぼくらがこの森の出口を探そうと歩き回っているせいなのかな?

頭をひねって考えるがちっとも分からない。

その時、遠くで落ち葉を踏む音がした。それも2つ。

ぼくはすぐにまた剣に手をかける。息を殺し、耳を澄ます。

「アル……ヒトノ、ニオイ」

「デモ、フルイ」

「モウ……ココ、イナイ。ニオイ、フルイ」
「モット、トオク……ソコ、イル」
ぎこちない会話が聞こえると二つの足音はだんだんと遠ざかっていく。ぼくは胸を撫で下ろし、剣から手を離す。
隣の篠宮さんは化け物が近くにいたことを知らず、穏やかな顔をしていた。いい気なもんだと思いつつ、高校1年の時からの顔見知りなのに、こんな可愛い顔をしていたのかと今更になって思った。
この夢を見るようになってから随分になるけど、あの頃と比べると篠宮さんもぼくにあまり文句を言わなくなったよなぁ……。ぼくはしみじみと思った。
思い返せば、ぼくがこの夢を見出した最初の晩、ぼくは出くわした篠宮さんを助けただけでも言ってきたのだ。

第14話

あの時、篠宮さんは周りを数人もの化け物に囲まれていた。武器を手にしていたが、形勢は不利で篠宮さんは服ににじんだ血の痛みに顔を歪めていた。

その時既にぼくはあの化け物を倒したことが何度かあった。しかも、襲われているのは夢の中とはいえクラスメイト。助けない理由がなかった。

しかし、ぼくが手を貸して化け物を倒しきると篠宮さんはキッと睨んで、持っている剣をぼくの前に突き出したのだ。

『何なの？　わたしは別にあなたの助けなんかいらなかったの。いい？　わたしがピンチに会った時にささっと現れて助けてくれる必要なんてないの。分かってる？　ま、分かってても分かってなくてもどっちでもいいから、さっさとわたしの前からいなくなって』

篠宮さんの言葉は刺々しく、苛立っていた。

その後が大変だった。まだ化け物はいるだろうから放っておけないとぼくは主張し、篠宮さんは一緒に行動する仲間なんていらないと抗議してきた。

お互いの主張は平行線のままだった。そのまましばらく言い争って結局ぼくの『篠宮

さんがぼくと行く気がないなら、ぼくは篠宮さんの後ろをずっとついていく』というストーカーじみた一言で半ば強引にこの形になったのだ。

でも、あの時ぼくは篠宮さんが言っていたことを分かっていなかった。翌日学校でそのことを思い知ることになった。

『何で知ってるの？　あんなこと誰も知らないはずなのに』

『言わないでっ!!』

頭の中で篠宮さんの声がフラッシュバックする。

あの日からぼくと篠宮さんの間に微妙な隔たりが出来てしまった。それでも日は1週間、2週間と過ぎていき、この世界での距離は元に戻りつつあった。そのことに関してぼくは内心ホッとしていた。

ただ、そのことが不思議なのだ。夢の世界篠宮さんも現実世界のも同一人物なのに。どうして夢の方だけ。

「……なんで、夢の中だけぼくに対して丸くなったんだろう……」

もしかしたら、篠宮さんなりに考えてることがあるのかもしれない。そう思っていると、

「だって、一人じゃ無理なんだって分かったから……」

声に気付いて振り返る。

「あ、ごめん。起こしちゃった？」
「うぅん、それよりも前に目が覚めてた。ちょっと、ヤな夢を見てたから……」
見ると確かに篠宮さんの顔は真っ青で血の気が引いていた。
「大丈夫？」
「桐原君はいいの。わたしのことは気にしないで」
口ではそう言うが、篠宮さんに元気がないのは明らかだった。
「気にするなって言われても……。じゃあ、どんな夢だった？」
「……暗い、部屋の中にいる夢」
聞いておきながらぼくは内心びっくりする。まさか篠宮さん自身が夢の内容を語ってくれるなんて！
ぼくを尻目に篠宮さんはポツポツと口にしていく。

第15話

「光がなくて、真っ暗な部屋。わたしは、そこに一人いて・・・。周りにはお気に入りの家具とか小物が、並んでいるんだけど、わたしは・・・どこか寂しくて、わたしは独りなんだって思うと、何でだろう・・・・・胸がつぶれるくらい、苦しくて・・・・・・わたしは泣いているの。そんな夢」

篠宮さんは片手で自分の顔を覆う。

「・・・・・・そうだったんだ・・・」

「あんなに嫌な夢は、久しぶりだと思う。夜の山の中に、誰かと触れ合わずにいる・・・孤独とか・・・・・・真っ暗な場所で遠くの山を、眺めてる畏怖感や・・・恐怖でも・・・・・・比べられないくらい・・・・・・。ヤダな・・・・・・こんな風に、思うなんて・・・・・・・・」

・・・・・ねぇ、桐原君は、・・・・・どうして、いなくならないの。わたしと一緒にいてくれようとするの」

質問していることが理解出来ずにぼくは篠宮さんのことをじっと見つめる。

「・・・・聞いてる?」

「あ、うん・・・・・・」

「じゃあ、どうなの？」

篠宮さんの目を見て嘘や中途半端なことを言ってはいけないと分かった。

ぼくが、篠宮さんと一緒にいる理由……。

初めの頃、篠宮さんは、昼ではぼくのことを避け、夜では罵り、早く目の前からいなくなれと叫んできた。

それでもぼくが毎晩一緒にい続けたのは、それは篠宮さんに言わないといけないことがある気がしたからだ。

頭の中の霧のかかったあの場所。ぼくはその言葉を伝えないといけない。そうぼくの直感が言っていた。

「それは、ぼくが篠宮さんと一緒にいないといけない気がするからだよ」

ぼくが霧の中の言葉を思い出すためにも。そして、それを言ってぼくは……。

……あれ、何だっけ？　言ってぼくは何をしたいのだろう？　たしか、ぼくはこのことをあの日学校で決心したんだけど……。

現実世界の記憶が朧げではっきりしない。勿論、夢から醒めれば思い出せるんだけど、また寝てしまうと忘れてしまうから困ったものだ。ぼくが桐原正也という名前であることは間違いない。それはこの世界でも現実世界でも。なのに、二つの世界は隔てられてはいないが、完全に繋がってもいない。こっちでもあっちでもぼくは同一人物なの

に、こっちであっちのことが思い出せないのは実に気持ち悪かった。
う～んと、何だっけ？　思い出そうしても、うんともすんともしない。篠宮さんは頭を抱えるぼくを見て鼻を鳴らした。
「……バカみたい。理由になってないし、それに、わたしと一緒にいたいなんて」
それからプイッとそっぽを向いてしまった。
「もういい。また寝る」
「はいはい、分かったよ。時計はないけど後で起こせばいいんでしょ？」
ぼくは思い出すことを放棄して相槌を打つ。
「そう」
「それと、もし化け物がやって来たりしたら」
「うん、その時は、頼んだからね」
篠宮さんは呟くと横になって動かなくなった。
寝息は……立てていない。
ひょっとしたら寝たフリだったりして。
そうだったらいいなと思いながら、ぼくは篠宮さんを起こすまでまた向こうに広がる緑を眺め出した。

6月7日昼、篠宮夕佳の擬装

第16話

ごめん、寝坊した。ちょっと遅れる。

電車の中で暇つぶしにとアプリのゲームをやっているとしよりから通知が来た。

通知に気をとられてゲームの連鎖記録がと切れてしまい、わたしは落胆する。このままいけば最高記録も出そうだったのに……。通知に関しては仕方がないが、機械なのだからせめてゲームが一区切りついたら表示するみたいな機能があればいいのに。わがままにもちょっぴり腹立たしく思いながらしよりに『了解!』と反応してわたしは視線をもう一度画面に戻した。

車内のスピーカーからまもなく次の駅に着くと案内が流れる。自分が降りる駅まで後2つだった。1回くらいならまだリトライ出来るかな?

そう思っていると、電車のドアが開き、仲の良さそうなカップルや茶髪の外国人が入ってきた。

あの人、イケメンだなぁ……。背が高くてすらりとした姿にわたしは画面のリトライボタンを押すことを忘れて見とれてしまう。外国人は車内を一瞥するとわたしのこと

ろから離れた、空いている席へと向かった。自然とわたしの目も後ろ姿を追いかける。するとふと中吊り広告に目が止まった。

吊されていたのはお決まりの週刊誌の広告で、今話題になっている俳優のゴシップ記事や政治家の汚職事件の文字がデカデカと書かれてあるあれだ。売れているのだからおもしろいと思う人がいるということなのだろう。案外クラスで隣のクラスの誰々ちゃんが同じ部活の誰それ君のことを好きなんだ、みたいな噂を聞きたがるノリと似ているのかもしれない。わたしはこういった類いに興味もないし、読んだこともないけど。

勿論、普通なら目もくれない。そのまま外国人を追いかけていた。でも、今回はある見出しに目が止まった。

その記事は最近クラスメイトを殺した高校生の少女についてので、後ろに『仲の良かった2人の間に何が?』や『学校では優しかった容疑者の素顔』といった文字が並んでいた。

こんなのに興味を持って読む人はこの子に同情なんか感じないんだろうな……。実際会ったこともなくただ活字の文面を読んだだけの人にこの少女はどんな風に写るのだろうか。奇人?　狂人?　人でなし?

わたしは気持ちが沈む。別にこの子とは知り合いでも何でもない。そうではないが、

人の内側までずけずけと入り込んだ脚が、そのままわたしの所まで足跡をつけようとしている気分がするのだ。

さっきの駅で乗ってきたカップルはわたしの向かいの窓に沿って配置されたシートに座っていた。はっきりとは聞き取れないが、何かの話で盛り上がっているようだった。楽しそうな話し声がかすかに聞こえて来るが、２人の前で仁王立ちして怒鳴り散らしたいと思うくらいわたしには耳障りだった。

電車のスピーカーがもうすぐわたしの下車駅に着くことを告げる。結局ゲームをもう一度やることは出来なかった。

第17話

電車が止まりわたしはノロノロとホームに降り立つ。そのまま重い足取りで改札口へと向かった。意識している物はよく目につくというのは本当のようで、歩いている最中に学制服を着た女の子達、それも誰かと一緒にいる子ばかりが目に入った。

話しながら歩いているあの子達は何の話題を話しているんだろう。どんな想いを今共有しているんだろう。

改札を出てわたしは近くの柱にもたれかかる。待ち合わせをしている人はわたし以外にもいた。みんな携帯をいじって時間を潰していた。どれくらい待っているのかは当人しか知らない。ただ、待っている人が現れるとみんな途端に笑顔になってこれ以上ないくらい楽しそうに話し出し、そのまま改札口前を去っていくのだ。

携帯を見てもしよりからの新たな着信はない。はしゃいでいるその人達を見ているとわたしは何だか寂しく、切なく感じた。

しよりが姿を現したのはそれから１０分後のことであった。

「ごめん、ごめん。遅れちゃって」

しよりがわたしの元へ駆け寄って来る。
「おはよう、夕佳」
「う、うん、おはよう」
さっきまでブルーになっていたことがバレないようにわたしは笑顔を浮かべてごまかす。しよりに合わせて今日は目一杯楽しまないと……。
「じゃあ、どこ行こうか？　夕佳はどこ行きたい？」
しよりはわたしの顔を覗き込むようにして言う。実は、今日は珍しく計画が全く立っていなかった。いつもなら1つくらいは『ここ行こう』と決まっているのだが、今日に限って真っ白だった。
「昨日の夜もうやむやになって終わっちゃったからね。う～ん、どこがいいかなぁ……」
わたしは腕を組んで考える仕草をする。とはいってもわたしは一緒にどこか行ったり、お買い物をしたりする気にはあまりなれなかった。学校や行きの車内のことが頭に残っていて楽しむ気分になれていないのだ。
「……思いつかないかな。しよりは？」
「あたしも」
「どうしようか？」

「…なら、中間テストの点数、アーンド日頃のうっぷん晴らしにとことん歌っちゃう？」
「カラオケか……いいかも」
「よし、行こーう！」
　わたし達は駅を離れる。街中に響き渡る喧噪が学校の中と似ているような気がした。
「ちゃんと沙菜にはメールなりなんなりしたんだよね？」
「昨日電話したよ」
　昨夜、わたしはしよりに勧められたように沙菜に連絡することにした。手段はいろいろあったが、わたしは声を聞きたくて電話を使ったのだ。繋がるか不安だったが、一発で繋がり、真っ先に沙菜の驚いた声が耳に入ってきた。沙菜はわたしに嬉しそうな口調で自分の高校生活の近況を話してくれた。部活のこと、勉強のこと、それに好きな人ができたことを楽しそうに語り、それからわたしとしよりはどんな感じかと尋ねてきた。わたしが相変わらずだよと言ってわたしがいろんなことを話している間、沙菜は嬉しそうに聞いてくれた。電話越しとはいえもう1年以上会っていない沙菜の声はとても懐かしかく、まだあの中学校時代に戻れるような気さえした。
「それでそれで？」
「電話してくれたことに喜んでくれたよ」
「そりゃそうでしょ。あ～あ、沙菜も来れれば良かったのに」

第18話

「部活、忙しいみたいだしね」
「夕佳は週に2回だっけ」
「美術部は楽でいいよー。入ってみる?」
「あたしには絵心ないもん。ムリムリ。それに運動してる方が性に合ってるし」
わたしが冗談めかした言葉に、しよりはケラケラと笑った。
でも、その笑顔が……羨ましかった。毎日のように部活仲間と一緒に練習し、チームとして目標に向かっているその姿が、実際はそうとは限らないと分かっていつつもわたしには眩しかった。美術部だって時に周りにアドバイスしたりするが、最後は個人作業だし。
カラオケボックスは駅からすぐの場所にあった。ビルに入りエレベーターで上がる。
「フリータイムにしよう!」
「そんなに歌い続けたら声枯れちゃうよ」
「いいのいいの。今日くらいいいじゃん」
しよりの勢いに負けて結局フリータイムになった。

ドリンクを入れてきて個室に入るや否やしよりは早速1曲目を選ぶ。曲は一昔前のヒット曲。イントロが流れ出すとしよりはマイクのスイッチをオンにしてノリノリで歌い出した。

自分も選ばなくてはと思い、曲を選ぶ機械に手を取る。頭の中にいくつかの候補が浮かんだ。

でも、この曲は地味だし、かといってこっちは歌ったら引かれるんじゃ……。

さんざん迷い、無難に今公開している映画の主題歌をセレクトした。

「そうだ、後で洋楽歌ってよ。前に歌ってた時にむっちゃ発音良かったし」

曲の間奏で一休憩していたしよりから注文される。

「そんなこと言って、しよりだって上手じゃん」

「あれはただ発音を真似てるだけだから」

「わたしもだって」

でも、せっかく聴きたいって言ってくれたし後で歌おっかな。

しよりの番が終わり、わたしの番が回って来る。それからわたし達は交互に曲を重ねていった。何度聞いてもしよりは上手い。わたしもあんな風に歌えたらなぁ。

歌い出してからあっという間に1時間が過ぎた。しよりは最初と変わらず歌い終わる度にちゃちゃっと次の曲を送信する。対してわたしはだんだんとレパートリーも減

り選ぶのに時間がかかるようになった。

曲が尽きたりしない、よね？

さらに1時間後、不安は的中し曲が尽きてしまった。こんなに歌ったことがなかったから仕方がないとは思いつつ、わたしは頭の中で歌えそうな曲を挙げてみる。残っているのはしよりがいるからという理由で歌うのを諦めた曲だけだった。もう曲がないとはいえ、誰かの前で歌いたいと思えるのではなかった。

後は……。

わたしは機械で検索する。最近毎朝通学中に聴いてる曲。好きではないが歌えないことはないだろう。無事見つかったのでこれを送信する。

「お、出たばっかの新曲じゃん。いい曲だよね～」

「わたしも通学中ずっと聴いてるけど、いいよね。初めてだけど歌えるかな」

わたしはとっさに嘘をつく。

第19話

飽きる程聴いた曲が大音量で流れ出す。わたしはマイクを手に取り歌詞の頭を歌い出した。が、何かしっくりこない。メロディーが遠くで鳴っているような気がするし、わたしの歌声も歌詞をなぞっているのに近かった。何よりも好きな曲じゃないからちっとも面白くない。

しかも、歌っているのに頭の中では別のことを考えていた。クラスの話し声。その中にいる桐原君。教室の中で桐原君はめったにわたしに話しかけてこない。そのことに内心安心していた。対称的に構わずわたしに話しかけてくる夢の中の桐原君。

こんなことを思い浮かべていると小学校の低学年に言ったら、『お姉ちゃんはそのお兄ちゃんのことが好きなんだよ！』とはやし立てられそうだが、馬鹿馬鹿しい。所詮汚れも知らない純粋な子供が考える推理だ。人間そんなに単純じゃない。そんな風に純粋で単純に生きれるなら今、わたしはこんなに悩んだり苦しんだりしていない。

歌い続けて声が枯れていることを差し置いても、今日の中で1番デキが悪いのは明白だった。声に伸びがないし、上がる所も上がり切れていない。集中が切れた中でわたしはたどたどしく歌う。

こんな曲、やるんじゃなかった……。

曲の後奏を聴きながらわたしは後悔した。

「う～ん、歌ってはみたけど、いまいち上手くいかなったかなぁ」

わたしはそう言って、テヘッと笑ってみせる。

「途中で集中も切れちゃってたしね。夕佳、どうしちゃったの？」

「考え事しちゃって……。歌い疲れてきているのかな？」

「じゃあ、少し休憩しよっか」

しよりは次にかかるはずだった曲を予約取り消しにした。画面には新曲やカラオケ機種の宣伝が流れ出す。

「夕佳、休憩中だけど聞いていい？」

「ん？　いいけど」

わたしはストローをくわえたまま返事をする。しよりは言い出しづらいのかテーブルに置いたマイクをしばらくいじっていたが、やがて意を決したように口を開いて言った。

「さっき歌ってる間、何考えてたの？」

「えっ？　……勉強のこととかだよ。歌ってる最中に考えることじゃないけど」

「本当に？」

「本当に」
「桐原君のことじゃなくて」
「どうして？　そんな訳ないでしょ」
わたしはもう一度嘘をつく。ただ、わたしの嘘は見透かされたみたいで、しよりは哀しそうな顔をする。
「やっぱり桐原君だったんだ……。桐原君と何かあったの？」
「何もないってば。しよりはたしのこと気にし過ぎなんだよ」
わたしがごまかそうとすると、しよりは眉を下げてますます哀しそうな顔をした。
「そうやって、あたしにはいつも本当のことを言ってくれないんだね……」
胸の奥にズキリと痛みが走る。わたしは思わず顔を背けた。

第20話

「ねえ、あたしだって夕佳の友達だよ。助けになりたいの。桐原君と何かあったってことくらいあたしにも分かるよ。夕佳のためにあたしに出来ることはないの？」

その真っ直ぐわたしを心配する声がわたしには耐えられなかった。聞きたくもない。うつむいたまま首を振るのがやっとだった。

「でも、このままじゃ、仲直り出来ないよ。いいの？　桐原君とは1年の時から友達だったんでしょ？　桐原君も夕佳のことが気にかかっていた。絶対に夕佳と仲直りしたいと思ってるよ」

違うっ！　そう言いたかった。桐原君を友達だなんて感じたこと、一度とだってない。そう叫びたかった。わたしは喉までかかった言葉をぐっと押し込む。

「……そんなこと、ないよ」

「何が？」

「桐原君がわたしのことを気にしてるはずがない」

「どうして？　まともに話しかけてないのに」

でも、分かっちゃうの。だって桐原君は知ってしまったから。

「最近あたしは桐原君と話したから分かるもん。本当に気にしてたんだよ。あたしの言ってること信じてくれないの？　嘘だって思うの？」
「信じてるよ。わたしがしよりを信じない訳、ないでしょ。でも……」
「でも？」
「しよりは、勘違いしてるんだよ」
　わたしの声は自分でも驚くくらい寒々しかった。顔は見ていないが、しよりが息を呑んだのが分かった。２人の間に訪れたしばしの沈黙はカラオケ機種から流れる宣伝映像の底なしの楽観的な音とひどくアンバランスだった。
「そんなことない。あたしは勘違いしてないよ」
「してるよ。桐原君はそんなこと思ってない。桐原君にはそんなことする意味なんてない」
「意味って……。だって、友達なんだから当然でしょ。じゃあ、夕佳はどうして桐原君には意味のないことだって思うの？」
　わたしから返ってくる声が暖かみのないものだと分かっているはずなのに、しよりの口調はどこまでも優しかった。それがなおさら苦しかった。
「だって……」
　桐原君はこれ以上わたしと友達でいても得なんかないから。言いたい言葉は口には

出来ず、口だけが虚しくパクパクと動いた。
「夕佳がどんな理由でそう言っているかは分からないけど、一旦落ち着いて桐原君に話しかけてみたら？　桐原君だって嬉しいと思うはずだよ」
「‥‥うん。そうだね‥‥‥‥‥‥」
夢の中の桐原君が思い浮かぶ。話しかけてくることに煙たく思ってはいるものの、あの桐原君ならもしかしたらわたしの話を聞いてくれるかもしれないという気持ちがちらつく。そうしたら、わたしは苦しみから解放されるのかな？
「ちょっとは頑張ってみるね」
けれど、口ではそう言っておきながら全く逆の思いが頭の大部分を占めていた。桐原君にわたしのことなんか分かるはずがない。桐原君だけじゃない。みんな誰も分かるはずがない。
すると、しよりは心配している顔のままわたしの側に寄り、わたしをギュッと抱きしめた。人の温もりってこんなに暖かかったんだと久々に思った。
「辛くてどうしようもなくなったらあたしにも言って。力になるから」
「うん、ありがとう‥‥‥」
その言葉に嘘偽りはなかった。ただ、わたしには自分がしよりに相談に乗ってもらう図など想像出来なかった。

今顔を見られたらしよりはもっと哀しそうな顔をするだろう。そう思ってわたしもしよりが体を離せなくなるくらいに強く抱きしめた。

6月22日夜、桐原正也の思案

第21話

ぼくらは背中を合わせていた。そう言えば聞こえはいいが、ぼくらの周りには黒い人の形をした化け物。しかも手に太い木の棒を持って。

「……イカセ……ナイ」

「ダサセナイ……」

「あぁ、うるさいうるさい！　化け物のくせに片言で喋れる上に、手に武器って反則だろっ！」

振りかぶって近付いてきた化け物をぼくは剣で切る。切る時に鈍い音がした。それでも化け物の全体数には大きな変化はない。もう既に何人倒したのだろうか。いつもよりも剣が重く感じられた。

篠宮さんは風が吹いた時の木の枝のように疲れでふらついている。

「篠宮さん、しっかりして！」

「分かってるってば！」

口ではそう言っているが体力の限界が来ているのは明白だった。そんな篠宮さんを

守りながら戦い続けるのは困難だった。そうでなくてもこの化け物の数はぼくにも荷が重い。

後はここから逃げるしかない。ただし、果たして篠宮さんをかばいながら周りを取り囲む化け物の壁を突破出来るのだろうか？

「篠宮さん、ここは逃げよう。勝ち目なんてない」

「無理に決まってんでしょ。まずこの囲まれている状況をどうするの？」

「篠宮さん1人かばうくらいなら、一点を攻撃して血路くらい……」

「無理っ！」

篠宮さんはきっぱりと否定する。

「そんなお気楽な状況じゃないでしょ！　桐原君はわたしのことなんか気にしないで逃げて」

「それこそ無理だよ。第一、自分はどうするのさ」

「わたしのことは自分で何とかするから！」

そんなこと出来ないだろと怒鳴りたくなる。だいたいぼくがこの状況であっさり自分以外のことを考えなくなるような人間だったら、最初から化け物に囲まれていた篠宮さんを助けたりはしない。

今度は篠宮さんに化け物が近付いてくる。篠宮さんはナイフを振るが、逆に化け物の

持つ棒で弾かれてしまう。ナイフは宙を舞い地面に突き刺さり、篠宮さんは慌てて取りに行こうとした。それをぼくは腕を掴んで妨げる。そして篠宮さんの手を握り、躊躇なく引っ張った。

「ちょっとっ！」

「ちょっとじゃないでしょ！」

向かう先には数人の化け物。ぼくはもう片方の手で持つ剣で化け物を力任せに切る。化け物はよろめいた。しめたとぼくは化け物に突進し突き飛ばすようにして化け物の壁を突破する。

「呆れた……」

「何が！」

「桐原君がこんなにバカだったんなんて」

後ろを振り返ると、当然化け物がぼくらを追いかけているのが見えた。ここは一段と木が生い茂っていて、視界が悪い。だからぼくらを見失ってくれないかなと淡い期待があったが、そういうこともなかった。目の前を遮るように木の枝があるのに気付いてぼくは手でどかす。

「篠宮さんには言われたくない！」

「桐原君がバカなんだからしょうがないでしょ」

「ぼくはバカじゃない。それに上手く突破出来たのに一体何の文句があるのさ」
「あるよ！　大ありだよ。だって、わたしのことを見捨てない」

第22話

篠宮さんは大きな声でぼくに訴える。それはどうして自分に構おうとするのか理解出来ない悲痛な叫びに聞こえた。ぼくは一瞬言葉に詰まる。でも、だからといってどうしてこの腕を放すことが出来るか。

篠宮さんの手を引いている分、振り返る余裕はほとんどなかった。ただ握っている細い腕だけが篠宮さんが後ろにいることの印だった。ぼくは篠宮さん腕を一層強く握った。

「……やっぱり、篠宮さんはバカだ」

「桐原君には言われたくないよ」

「助けてあげようって言ってんだから大人しく助けられればいいんだよ！」

「助けはいらないって言ってるでしょ。なら、わたしの好意に甘えなさいよ」

「ことあるごとに森を抜けたいって連呼してる人の言う台詞じゃないよ。文句ばっか言ってないで走る。それでこの森を抜けるんでしょ」

「そんなの……」

篠宮さんが何か言おうとした時、篠宮さんが地面に生えていた木の根につまずいてし

まった。
「きゃ」
「あ！」
　篠宮さんはそのまま倒れ、つられてぼくも体勢を崩す。しかも悪いことにぼくと篠宮さんの手が離れてしまった。
「イカセナイ……」
「イクナ」
「ノコレ。ソレガ……イイ」
　化け物が追いつくのに時間はかからなかった。化け物の一人が立ち上がろうとしている篠宮さんの元に歩み寄り篠宮さんを捕まえる。
　篠宮さんはじたばたと体を動かすが、化け物の手がしっかりと胴体を押さえていて逃れられない。化け物は篠宮さんの耳元に口を近付け、何かを囁く。すると篠宮さんの顔が青ざめていき、抵抗するのを止めてしまう。
「篠宮さんっ！」
　ぼくはとっさに名前を呼んだが耳に届いていないのか反応がない。ぼくは剣を握り直し、化け物の横腹に向けて突進する。篠宮さんを捕まえていた化け物は砂になった。ぼくは篠宮さんの手をもう一度と握り、走り出そうとする。が、今度はぼくが足を1歩

前に出した姿勢で固まってしまった。

偶然視界に入った森の地面。そこに卒業アルバムが落ちていた。それもただのアルバムではなかった。そのアルバムは誰かの手によってビリビリに破られていた。本来受け取った人を懐かしませるための写真の数々が無惨な姿で土や落ち葉の間から顔を覗かせている。その内の一つの写真からぼくは目が離せなくなる。

その写真は女の子3人が横一列に並んで楽しそうに笑っている写真だった。ただし、1番左の子だけなぜか顔が黒のボールペンでぐちゃぐちゃに消されていた。

この子は一体誰?

「コノ、モリニ……イロ」

「イクナ。……オマエ、イクナ」

「オマエニハ、ムリダ」

「ココニ、ノコレ」

ぼくらを取り囲む化け物のいくつもの声がノイズとしてぼくの耳に届く。急いで逃げないと。しかし、ぼくはかつて卒業アルバムだった物から意識が離れない。ぼくには顔を消された子の肩に手をかけている真ん中の子の顔に見覚えがあった。眼鏡をかけていて今よりも子どもっぽいけど間違いない。同じクラスの浅野さんだ。篠宮さんと友達の。

嫌な予感がした。右側の子の顔には見覚えがなかった。浅野さんと知らない誰かと、顔の消された3人の写真。まさか……。

しかし、腕をぐいっと引っ張られて思考は停止させられた。視界に写る物が横に流れていく。

「篠宮さ……」

「何も言わないで」

篠宮さんは鋭くぼくの言葉を遮る。

「何も言わないで。何も聞きたくないの」

顔を歪めながら言うと篠宮さんは黙ってしまった。

第23話

篠宮さんが走る先は更に草木が生い茂っていて獣道ですらなかった。細い木々の幹の間は肩幅がぎりぎりあるかないか程度の幅で、注意しないとすぐに体が当たってしまいそうだった。

後ろを追いかけてくる化け物との距離は意外と縮まっていなかった。群れをなしているせいで、所々で木々にぶつかって減速しているからだ。しかし、いずれはこちらが先に体力が尽きる。それに化け物がそうであるようにぼくらもぶつかったり転んだりする確率は上がっているのだ。

前を走る篠宮さんの動きを見てぼくは木の根を飛び越えた。こんなのただの時間稼ぎでしかない。それでも、ぼくらにはこれ以外には選択肢がないのだ。その時、

「おいっ！　こっちだ」

不意に茂みの中から声がした。聞いたことのない声だが、流暢な口調はこの森の化け物と比べてずっと人間らしいものだった。篠宮さんは迷うことなく声のする方へと舵をきる。誰かも知らない声の主なんて怪しさを感じるが、ぼくは今まで通り篠宮さんの勘を信じることにした。

「お～い」

近付くと肌色をした手がぼくらに向かって振られているのが見えた。少なくとも化け物ではなさそうだ。篠宮さんはその手を目印に走るペースを速める。視界を塞ぐ緑が次々と後ろへと消えていく。ようやく木の幹からぼくらを招いていた男が姿を現した。長身だが細身でどこか女性らしさをはらんでいた。年は分からないが、ぼくらとあまり変わらないだろう。ファンタジーゲームに出てきそうなエキゾチックな服を着ていて、森の中で会う人らしい雰囲気だった。

「ついてきて！」

ぼくらを一瞥すると青年はきびすを返して走り出した。結局また走るのかと思いつつ青年の後についていく。

「マテ……」

逃げるのが三人になっても相変わらず化け物は棒を持って追いかけてくる。謎の青年に招かれたけど、結局のところ青年に何かしらの考えがない限り現状に変化は訪れない。それならこの男を頼る必要が一体何処にあるのだろうかと思ったが、青年が振り返って言った。

「気をつけて。降りるから」

……降りる？

よく見ると向こうにあるはずの草木がぽっかりと切り取られていた。近付いてからこの先が斜面になっていることに気付く。先を走る二人の頭が目線の下へと動いていった。

篠宮さんもよくあの男についていく気になるよなぁ。声を聞いただけで駆け寄るし、斜面を降りると言っても従うし。ひょっとしたら篠宮さんとあの男は知り合いなのだろうか？　篠宮さんの知り合いをぼくが全員知っていないことは別におかしいことではないし、あの男もぼくらのように夢を見ている現実世界の一人間にすぎない可能性だってある。

斜面を下っている最中に何度かバランスを崩して転げ落ちてしまいそうになった。傾斜が急なのだから当然っちゃ当然なのだが、青年はまるで野生の動物のように慣れた動きで降りていく。山育ちの人なのかもしれない。大抵は便利な物に囲まれた街暮らしで良かったと思っているぼくも今回だけは羨ましかった。都合のいい考えの持ち主である。

最後の方は足が勝手に動いていたが、何とか降り切った。二息歩行の人間には少々酷な傾斜だったのではないだろうか。あの男は苦労した顔一つしてはいないけどさ……。

青年はぼくらの方を向いて待ってくれていた。ただ、最後尾のぼくが追いついても青年の足は動こうとしない。

逃げなくていいんですか。そう聞こうとしたが、背後から何も音がしないことに気付く。斜面を駆け下りる足音。

「彼らは降りて来ない。わざわざこんな無意味な危険を冒す気なんてない」

はるか上の斜面のてっぺんでは化け物がぼくらを見下ろしていた。だが、1人1人消えていきやがていなくなった。

第24話

「ずっと走り続けてたんだから、少しでも休んだ方がいいだろ?」

いなくなっていく化け物を見送ってからそう言うと青年は近くに倒れている木の幹に腰を降ろす。青年の心遣いにぼくはお礼を言おうとしたが、今度は口が従ってくれず、ハアハアと断続的な呼吸をしている。困ったものだ。このまま立っていても意味はないのでぼくと篠宮さんも手頃な物を見つけて座った。ちなみにぼくらが座ったのは捨てられていた学校の椅子である。

「そういえば、自己紹介をしないと。私はこの森に暮らしている住民で、名前は……悪いけど持ってない。だから私のことは好きに呼んで構わない」

青年は申し訳なさそうに言った。

「それで、君達の名前は?」

「き、桐原です……」

「わたしの、方は……篠宮……」

篠宮さんも口が言うことを聞いてくれないようだ。肩が大きく上下している。名前を言ってからしばらくお互い無言だったが、呼吸が落ち着いてきたところで篠宮さんが

青年に頭を下げた。
「あの、助けてくれてありがとうございました」
　疲れているのか、篠宮さんの言葉には元気がなかった。青年は照れくさそうに頭をかく。
「気にしないで。助けることを選んだのは他でもない私なのだし。それより、休んだらまた歩ける？　とりあえず私の家に来るといい」
　青年の口ぶりからは篠宮さんとは面識がないことが分かる。さすが篠宮さんの勘だと感心しつつもさっきから胸に突っかかる疑問は更に大きくなる。身のこなしといい家といい、この男、誰だ？
「家、ですか？」
「そう。この森の住民だからね。桐原君だって帰る家くらいあるだろ？」
　青年はさも当然に言う。そりゃ、ぼくにだってあるけどさ、そうはいっても現時点では夢から目を覚まさないと帰れないんだけど……。
「珍しいですね。ぼくらもだいぶ歩き回りましたけど、住んでる人に会うのは初めてです」
「私も会ったことがない。今のところ、私くらいしかいないんじゃないか」
「大変そうですね」

「そうか？」
「そうですよ。だって、困った時に誰も頼れないじゃないですか」
「1人は1人で気楽でいい。寂しくない訳ではないが、代わりに周りを気にしなくて済む自由さがあるし」
　青年のその言葉にぼくは大人びた雰囲気があるなと思った。大人というのはきちんと自分で立って歩けて悩みも問題も壁も背負って生きていくことが出来る人なのかもしれない。今の自分には到底無理な話。というか多くの人も無理だとは思うけど。ぼくはうじうじしているし、悩みや自分の言動でそこら中をのたうち回りたくなる気分にもなる。それでも何とか折れずにやってこられたのは、憧れは持ち続けながらも自分の人生なんてこんなものかと思ったりしていたから。もっとも、所詮虫のいい大人への幻想を抱いていることくらい分かっている。後はそれを虚像なのだとスパッと切り捨てられれば何の問題もないんだけど……。
「でも、化け物が出て来た時に苦労しませんか？　1人ならまだしも2人や3人だったら……」
「いや。住民になったら全然たいしたことないものだよ。あまり襲って来なくなるし」
　青年は歯を覗かせて笑う。半袖の袖口から先の露出した腕は女子が羨ましがりそうなくらい白いが適度に筋肉が付いていて、妙にアンバランスだった。

そんな中、遠くでかすかではあったがガサガサと音がする。篠宮さんの肩がビクッと上がった。

第25話

そういえば、さっきから何も話してないよな……。目線は自然と篠宮さんに向く。いつもはハキハキとしていて、随分と丸くなったとはいえ、吐いてくる毒に時々ムッとさせられたのに、さっき化け物に何か言われてからめっきり元気がない。体が小刻みに震えていて、明らかに怯えている。その姿を見ると何とかしてあげたくなるが、ぼくが篠宮さんを守り続けても化け物の出現が途絶えることはない。それに今のように化け物が群れをなして襲ってきたらぼくも逃げるしかなくなる。根本的な解決にはならないのだ。

「あ、あの。実はぼくらこの森を出たいと思ってそれで歩き回っているんです」

この森に住んでいる人ならひょっとして森を抜ける道を知っているかもしれない。すると青年から意外な返事が返ってきた。

「知ってたよ」

「えっ？　知ってたんですか？」

「勿論。だって君達のような人なら大抵出口を探そうとするタイプだし」

「じゃあ、出口はあるんですか？」

「あるし、知ってるよ」
　青年は平然という。ぼくの中に嬉しさが込み上げてくる。もうすぐこんな夢を見ることも、先行きも分からずに不安に包まれて歩き回る必要もなくなるのだ。ただ、篠宮さんの様子を伺ってみたが浮かない顔なのは変わらない。出口を知っている人に会えても、化け物のことでいっぱいいっぱいになっているみたいだった。
「ねぇねぇ、篠宮さん。聞いてる？」
「えっ？　う、うん。この森を出られるかもしれないんでしょ。そう、でね……、良かったね……」
　篠宮さんの口調は歯切れが悪かった。昨日までは、森を出たいと何度も口走っていただけに首を傾げる。やはり、あの化け物に何か言われたのが原因なのだろうか……。それを青年は黙って見ていた。
「……さて、そろそろ行くか。続きは私の家に着いてからにしよう」
　青年は立ち上がる。それを見てぼくも立ち上がる。
「行きますか」
「でないといい加減彼らがここに辿り着くからね」
「へ？」
　その時、会いたくない奴らが向こうの木々の間から現れた。場所はぼくらからそう離

れていない。すでに視界にぼくらを捉えていて、化け物はこっちに駆け出す。
「ど、どういうことですか!?」
「だから、彼らはわざわざ斜面を降りるような危険なことはやらないんだって。彼らは別の場所から降りてきてここに来たんだよ」
「先言ってくださいよ!」
「分かってると思ってた」
化け物はどんどん近付いてくる。篠宮さんは叫び声を上げる。
「どうするんですか!」
「ひたすら逃げる。私の家はすぐ近くだし」
やっぱり逃げるしかないんですね……。ため息が虚しく口からこぼれ落ちる。

第26話

ぼくはガクリと肩を落とし、また走り出す。さっきまで休憩していたとはいえ体力が完璧に回復するはずはない。すぐさま息が切れる。

走るぼくらと走る化け物。またこの構図かとイライラしてくる。それは闘うための武器を持っていながら逃げるしかない悔しさであった。

この森を歩けば必ず化け物に遭遇することになる。一種の試練でもあった。倒したい。勝ちたい。しかしぼくも何人もの数で向かって来られたら太刀打ち出来ない。篠宮さんならなおのこと。試練に打ち勝てない。もしかしたらこのままずっとぼくらは……。

「大丈夫だよ」

前の方から声がする。

「大丈夫。君はもうこの森から出れる。それだけの力がある。だから逃げるしかなくても今は逃げればいい」

どうしてかぼくが思っていたことが青年に筒抜けだった。走ることに必死で無意識に口に出していたのだろうか。ただ今の状況で青年に聞くことも出来ず、実際のところ

は分からない。それよりもぼくは別のことの方が引っかかっていた。「君はもうこの森から出れる」の言葉。君であって、君達ではない。なら、篠宮さんは？

「オマエ……ノコレ。デルナ……」

「デタラオマエ、ツライ……。ココニ、ノコレ」

「デテイクナ……」

化け物は口々に言いながら追いかけてくる。篠宮さんは両手で耳を塞いでしまった。

「来ないで、来ないで。いやぁぁっ!!」

篠宮さんの突き刺すような悲鳴が森中に響いた。しかし走っているぼくらもかまっていられない。ただ聞いているしかなかった。

森の木々は背が高く、ぼくらを覆うように生えていた。見下ろしている木々。でも、不思議とぼくには恐怖心とかはなかった。

そういえば今まで化け物のことを怖いと思ったこともなかった気がする。勘違いの場合もあるけど。それはどうしてなのだろう……？　ぼくは化け物と戦えるから？　篠宮さんと違って……。

青年はちょくちょく後ろを気にしてくれるのでぼくらが遅れることはなかった。ただしその分だけ化け物との距離は縮まっていく。ぼくは歯を食いしばって走り続けた。

そして、目の前に木の扉で閉じられた横穴が目に入った。

「あれ！　私が食い止めている間にこれで開けて！」
　青年は後ろに捨てるように鉄でできた鍵を投げる。ぼくはすかさずキャッチする。扉には錠前が1つ付いていて、でも、もたついてなかなか鍵穴に入らない。
「早くしてよ、役立たず！」
「待ってよ」
「急いで！　来ちゃうってば。いや……もう、いやぁぁ!!」
　篠宮さんはヒステリックな声を上げる。
「落ち着いて夕佳さんっ!!」
　目線を化け物から反らさないまま青年が言っても一向に止む気配がない。
「桐原君も急いで！」
「待ってください。上手く入らないんです」
　化け物は近付いてくるばかりだった。青年は舌打ちをする。
「本当はしたくなかったんだが」
　そう言うと青年は右手を大きく横に振った。すると最前列の化け物が一気に砂になって消えた。ぼくはあっけにとられる。ぼくは武器がないと倒せない。それなのに青年は武器なしで、それも触れることなく一度に何人もの化け物を倒せている。この力は、一体……。

「こっち見てないで、いいから早く開けて！」
「は、はい」
慌ててぼくは視線を元に戻す。青年はもう一度手を横に振る。
「桐原君、お願い。何とかしてっ！」
篠宮さんは喚くような声で懇願する。その時、鍵が見事に鍵穴に入った。捻るとカチッと音がした。

第27話

「開きました！」

急いで、扉を開けて中に入る。篠宮さん、青年も去り様にまた化け物を砂にして続く。全員入ったところで傍に立て掛けてあった棒を差し込む。完全に差し込んだところでぼくはふぅと息を吐いた。

部屋は薄暗かった。完全に真っ暗ではないのは壁の上方の四角い穴から日の光が入ってきているから。青年はマッチを擦りロウソクに火を移す。するとより中の様子がはっきりと分かった。床や壁、天井まで木の板で横穴のゴツゴツとした表面が覆われていて、目の前にはアンティークな木製の椅子、テーブルが置かれている。目線の上にしか窓がないことを除けばログハウスの部屋にいる気分だった。各部屋はノブ付きの扉で仕切られていて横穴全体の大きさは分からないが、扉の数から十分な広さはあるだろう。

「ここにいれば心配ない。彼らもさすがにここまでは来ない」

部屋の中のロウソクに火を灯し終わって青年はニコリと笑った。確かに化け物が入口を叩いている様子はない。篠宮さんはへたりと崩れ落ちる。

「もう、いや……」
心配になってぼくが肩に手をかけようとするが、篠宮さんはそれを拒否して手を払う。向かう先をなくしたぼくの手は虚しく動きを止める。
「嫌い、嫌い……。みんな死んじゃえ……」
篠宮さんは両耳を塞いで震えていた。青年はそれを見つめていた。
「夕佳さん」
青年はゆっくりと声をかけた。
「怖がらなくても彼らは君達を殺すために襲って来てはいない」
「なら、どうしてわたしは…？」
「彼らは君達、特に夕佳さんがこの森から出るのを止めたがっている。だから君達が出口に向かえば向かう程、彼らの妨害は執拗になる。それだけのこと」
「でも…それでも、わたし弱いから…そんなこと言われても……」
「なら、この森の住民になればいい」
篠宮さんは上目遣いで青年を見た。驚きと純粋に興味を持っている目だった。
篠宮さんの様子がやっぱりおかしい。あれ程出たいって言っていたのに…。本当は特別出たいだなんて思ってなかったのだろうか…。
化け物と何度も出くわしても、その度に怪我をしても篠宮さんは出ることを諦めよう

とはしていなかった。篠宮さんはこの森を出たいと思っている。ぼくの中にはこれまでそれが確信としてあった。それが今、揺らいでいる。

篠宮さん……。

「住民に？」

「そ。この森に残ることは何も卑怯者がすることではない」

青年のはっきりとした物言いに、ぼくは内心苛立ちを覚えた。これまでの篠宮さんの努力を無にするつもりなのか。ぼくは我知らずに青年に食って掛かっていた。

「でも、ぼくらは森を出るために出口を探していたんですよ。ここに残る選択肢なんてないじゃないですか」

「1人で彼らを倒せない状態で？」

第28話

「……それってどういうことですか」
「言葉の通り受け取ればいいんだよ。夕佳さん1人ではこの森を抜けられない。その状態で森を出ても、決して夕佳さんのためになるとは限らない」
「言ってる意味が分からないです。篠宮さんもそうでしょ?」
ぼくは篠宮さんに向き直り同意を求める。が、篠宮さんはうつむいているだけだった。ぼくは動揺を隠せない。一方の青年はまるで篠宮さんが素直に出たいと思えない理由を知っているかのような表情をしている。
ぽちゃんとしずくが落ちる音がした。今までずっと話し込んでいて気が付かなかった。洞窟の隙間から漏れてくる水なのだろうが、どこから音がしたのかはぼくの耳では判断出来ない。
「……そうだ、ね」
「篠宮さんっ!」
ぼくは思わず声を張り上げる。
「篠宮さん。ぼくだって怒るからね。今までずっと一緒に頑張って来たのに、諦めるつ

もりなの？ここに残るとでも言いたいの？」
どうして他人のことにムキになるんだか。口から出る言葉が止まらない。
納得いかない。篠宮さんが諦めてしまうことも、ぼくが一緒にいたことが無意味になることも、頭の中のあの場所の霧が晴れないままになることもぼくは受け入れられなかった。
「うぅん、そんなことはないよ。ただ、わたしには森を出る以外にも選択肢はあるって言いたいだけ。ただ……」
「ただ？」
ぼくが聞き返すと、篠宮さんは耳を塞いでいた手を離すと、ゆっくりと顔を上げ、青年の目をじっと見るようにしながら、ポツリポツリと続ける。
「…ただ、わたしはこの森を出たい。数え切れないくらい化け物に襲われて痛い思いをしても、それでも、わたしはどうしても…」
「夕佳さん……。それじゃあ、この後辛くなるよ。痛みに耐えるだけを考えてたら森を出ても、苦しくてどうしようもない悲しみに襲われるだけだよ。それも、化け物の時とは比べられないくらいの。出口の先にあるのは幸せだけじゃない。それくらい、分かってるだろ？　住民になれば化け物に襲われることもなくなるし、森の先で待っている苦しみと遭遇することもない。住民になることだってそんなに難しいことじゃない

し」

青年は優しく篠宮さんに語りかける。それは本当に篠宮さんのことを心配していることをありありと示しており、ぼくはこの森に残るよう勧めている青年を責められなくなっていた。

「難しく、ないの……？」

「勿論。ただ薬を飲むだけでいい。これくらいの小瓶に入った。今見せるよ」

青年はそう言うと立ち上がってぼくから見て左側の扉を開けてその中に入っていった。

第29話

青年が席を外して部屋にはぼくと篠宮さんだけになった。篠宮さんは思い詰めた顔をしている。ぽちゃんとまた水が落ちる音がした。心配になってぼくが声をかけると、少しだけ首を動かしてこっちを見てくれた。ただ、表情はそのままでその後すぐに視線をそらされてしまった。

上の小窓から穏やかなお日様の光が洞窟の中に漏れ出している。窓から見える空は赤みがかっていて、外の景色は見えないがもう夕方なのだろう。

そういえば、今まで毎晩ぼくらは森の中を歩き回っていたんだなぁ。ぼくは不意にしみじみとした感に襲われる。

宛てなんてないようにも思えた木々。黒い人の姿をした化け物。照りつける太陽に静かに光り輝いていた月や星。ぼくと篠宮さんはたわいもない言葉を掛け合い、出口を目指して歩数を重ねていった。そして、さっき出会った青年が言った。私は出口を知っているのだと。

ようやくここまで来たのに。なのに……。

やがて、青年が手に小さなガラスの小瓶を持って戻ってきた。青年は開いた篠宮さん

の手のひらに小瓶をちょこんと置く。
「これだよ」
「……あの、これを飲むだけですか？」
「そうだよ。分かりやすいだろ？」
中には半透明の白く濁った液体が8分目の辺りまで入っていた。
篠宮さんは両手でその小瓶をそっと目の所に近付けてしげしげと見つめる。
「これを、飲むだけ……。これを飲めば、本当に楽になれるの？」
「少なくても君の中で落とし所はちゃんとつく」
「これを……」
篠宮さんは噛み締めるようにゆっくりと呟いた。
「焦らなくてもいい。私はいつまでも待ってるから。それに私は夕佳さんにじっくり考えて、その上で決断して欲しいと思ってるし。桐原君はどうする？　君は残るつもりなんてないだろうけど、先に森を出たりしないで夕佳さんを待つかい？」
「構わないですよ。ぼくは」
「いいよ、別に。わたしだけ残ればいいから」
篠宮さんは小瓶を見つめたまま主張する。
「良くないよ」

「いいから。桐原君はこの森を出て。迷惑はかけられない。かけたくない。だってわたしは……」
「だって?」
　ぼくが聞き返すと篠宮さんは唇を噛み、小瓶をギュッと握ってうつむく。
「だって、わたしは……わたしは、本当は……」
　そう言うと篠宮さんの口は止まり、言葉が消えてしまった。ぼくは篠宮さんを見やる。教室の中では見たこともない姿。しかし、この夢の中では何度も見たことのある姿。それは迷い、立ち止まってしまっている姿だった。
　こういう時、ぼくは何と言ってあげたらいいのだろうか。ぼくは今更になって思った。悩んでいる篠宮さんを前に助けになりたいとぼくはあの時、学校の図書室で思っていたのに、今までのぼくはずっとかける言葉がなかった。というか思いつかなかった。
　いや、違うかもしれない。変なことを言ってしまうことを恐れていたぼくは頭の中の霧が晴れないことを言い訳にして何も言わなかったんだ。例え霧が晴れていなくてもぼくは今篠宮さんに何か言うべきなんだ。
「ここまで来たんだ。ぼくは待つよ。……でも、勝手だけどぼくは篠宮さんにここに残って欲しくない」
「どうして?　……わたしなのに」

篠宮さんは弱気で小さな声で言った。

「それは、ぼくが一人でこの森を出たくないからだよ。そんなためにぼくは篠宮さんと一緒にいたんじゃない。森で最初に会った晩に篠宮さんは絶対この森を出るんだって言っていた。だからここまでぼくと一緒にいたんでしょ？　ねぇ、だからぼくとこの森を出よ？」

篠宮さんはぼくの方を向いた。ただ、篠宮さんはうつむきがちなままで目線も下を向いていた。

第30話

「ちょっと・・・考えさせて・・・」
「なら、正面の扉の先にある一番手前の客室をつかうといい。鍵もかけられるし、ゆっくり考えて」
　篠宮さんはコクリと頷く。それからぼくに「ごめんね」と言うと、小瓶を握りしめたまま扉の向こうに消えていった。
「ぼく、何か悪いこと言っちゃいましたかね?」
　奥で部屋の扉がバタンと閉じる音がした。
「大丈夫だよ。ちゃんと伝わってる。夕佳さんだって君の気持ちは分かってるから。夕佳さんは今すごく不安定なんだよ。だからこそ夕佳さんは迷ってるんだ」
　青年はぼくの肩をポンと叩いた。
「でも、ぼくにはまだ篠宮さんに言わないといけないことがあると思うんです。どうしても思い出せないんですけど、何か大事なことを。それを言わなくて、ちゃんと伝わってるんでしょうか」
　正直、本当に言いたかったことかも分からないまま言ってしまって良かったのだろう

か。ぼくが不安げな顔をしていると、青年がぼくの前でニコリとした。
「そんなこと気にしてもしょうがないだろ。何を言うのが正しいなんて誰にも分からない。それに君はまだ夕佳さんと一緒にいられるよ。それを言う機会がまだ来てないんだろ？　だから安心しな」
「……本当にそうですかね？」
「そう思えばいいんだよ。焦らなくても辛抱強く待っていればその機会はやって来る。そう思ってる方が気が楽じゃないか。どうせその機会っていうのは君の勇気なんだから。全ては君次第。まぁ、夕佳さんが選ぶまでしばらくはここでゆっくりしていって。夕佳さんの隣の客室がまだ空いている。足りない物があったら呼んでくれ。私は自分の部屋にいるから。さっき小瓶を取りに入った部屋だよ。じゃあ、ごゆっくり」
青年はそう言い残して部屋を出ていった。
夢の中なのに妙に的を突いたこと言ってくるよなぁ……。
青年の背中を見つめながらぼくは割と失礼なことを思った。
「勇気……」
ぼくは小さく口に出してみる。不思議と頭から離れない。あながち青年の言っていることも間違っていないのかもしれない。
今のぼくには勇気を持って篠宮さんに何か言う図が想像出来なかった。

どうしたら想像出来るようになるんだろう？　足りないものは勇気だけじゃない。ぼくが勇気を持つのに必要なものがぼくにはない。

それは、何だろう？

ぼくはもう一度頭のあの場所を覗いてみる。霧はかかったままだった。けれど、さっき見たときよりも霧が薄くなっているような気がした。

なら、これでいいのかもしれない。霧が一向に晴れなくても、篠宮さんに代わりの言葉を言えば、そうすれば……。

ぼくは頭の中で剣を振り回し続けた。

6月24日昼、篠宮夕佳の下向

第31話

学校のチャイムが鳴り、午前中の授業が終わる。号令がかかり先生が教室を出ると教室内にあった緊張の糸がプツンと切れて、急にガヤガヤし出した。わたしも同様にふぅと一息をつく。良かった、これで後ろを振り返れる。後ろの席に座っている桐原君がずっとわたしの方を見ているような気がしていたのだ。

最近夢の中の桐原君が頭から離れない。それは最近現実で桐原君とろくに会話をしてないせいもあるんだろうけど。夢の中に出てくる桐原君と今ここにいる桐原君が別人とは思えないし、夢の中で彼が言っていることにも嘘はないとは思う。

だがしかし、本当に信頼していいのだろうか。何よりも桐原君を受け入れることをわたし自身が許せるのだろうか。あんなことがあった以降も夢の中でわたし自身は桐原君ときちんと話をしている。それは本当のところ桐原君を拒絶しようとしていないことの現れだろうか？　ただ、強がっているせいかもしれないけど、現実では会話したいと思えないし……。

「ねぇねぇ、夕佳」

考え事をしていたわたしはしよりのわたしを呼ぶ声ではっと我に返った。あの休日以降もしよりは今まで通りに接してくれていた。わたしもまた何もなかったかのように振る舞っている。

「一緒にお昼食べよ？」

しよりは何処からか適当に椅子を持ってきたようで、わたしに向かい合う形で座った。そして手にしていたコンビニのビニール袋を机の上に置いた。わたしは机の上にあった教科書類を仕舞う。

「食べ終わったら世界史のノート見せて」

「また？」

「カタカナの羅列を見てると眠くなっちゃって……」

「いいけど」

「ありがとう！　恩に着る！」

先週もこんな会話をしたような……。前回の定期テストでしよりは何点取ったんだっけ？　わたしは机の中から世界史のノートを取り出す。そういえば、ノートを見せてと頼むのは出会った頃から相変わらずだったような気もする。中学時代はわたしだけでなく沙菜のノートの時もあったけど。変わらない光景。

しよりは白いプラスチックのフォークで買ってきたサラダをパクリと食べる。いつ

も通りのお昼の光景。

「夕佳ってさ、放課後空いてる？　今日帰りにクレープ食べに行こ」

そうやって甘い間食をするから痩せないんだよとは言えない。わたしも食べたいし。

「いいね！　行く行く」

「じゃあ、決定～。駅前の店でいいよね。季節限定の商品を売ってるんだって」

「いいよ。で、その季節限定のって？」

「それはね……」

しよりの口調はウキウキとしていた。すると、クラスの他の女子達がワラワラとやって来て「何やってるの？」と会話に加わってきた。楽しさの混じった声が飛び交い、みんなで一緒に行くことになった。穏やかな会話。穏やかな空気。雲が二つ、三つ浮かんでいるが、空はまだ清々しいくらい蒼かった。

第32話

お昼を食べ終えた辺りで、じゃあ放課後教室に残ってねと約束して、周りの女の子はワラワラと帰っていく。見送るわたしは良かったと内心安心した。それは一緒にクレープを食べに行けるのと彼女達が戻っていったことの両方で。ただ、目の前にしよりがいるのを思い出してわたしは顔を見られまいと机の側面にあるフックにかけた鞄の中を見る仕草をする。

「何か探してるの？」

「えっ？　ちょっと、本の延長手続きしないとなぁって思って」

わたしはしよりに鞄の中にあった図書館の本を見せて辻褄を合わせる。実際返却日は今日になっている。次の絵の下書きの為に借りたのに、肝心の下書きはさっぱり進んでいない。

桐原君のせいだ。桐原君のことが気にかかって全く集中出来ないし、やる気になれない。

「すぐ戻ってくるから図書館行って来るね」

本当は昼休みに行くつもりなんてなかった。でも丁度いい。

「期限なんて無視しちゃってもいい問題ないのに。あたしも付いて行ってもいい？」
「しよりはさっさとノートを写す」
「は～い」
　しよりは諦めてシャーペンのお尻をカチカチと押して芯を出す。わたしの真意に気付いているのだろうか？　わたしは本を片手に教室を出る。朝学校に行くと机の上に督促状が置いてあるなんて状況にはなりたくない。
　図書室は階段で3階に降り、そのまま直進すると右手にある。途中でパタパタと廊下を駆けている女子とすれ違う。急ぎの用事でもあるのだろうか。それとも、行く先に楽しみにしてるものでもあるのかな？
　中学の頃、昼休みはよく沙菜ととしよりと追いかけっこをしていた。校庭の時もあったけど、多くは校舎内で、お互い下に体操着の短パンを穿いて制服のまま走り回っていた。逃げる二人のブレザーとスカートがはためいていて、それがとても可愛くて、捕まえる瞬間は決まって後ろから抱きついていたっけ？
　高校生になって以来別の学校に通っている沙菜とはあの日に電話をして以来画面上でも喋っていない。もうすぐ試合があって忙しいらしく、電話をするのははばかられ、かといって画面上に表示される沙菜の言葉は活字でしかなくて、それがわたしと沙菜の距離を示しているみたいでやる気になれなかった。

もし、沙菜が明日転校してきたらと想像する時がある。でもそれは自分の頭の中の妄想であって、実際に転校してきたとしてもあの頃に戻れるはずはない。わたしが中学時代に戻れたら話は別だけど。もしくは同じ高校になったのがしよりじゃなくて沙菜だったら……。

ってわたし、何考えるんだろう。

嫌悪感が込み上がって来てわたしは頭を振って否定する。ただ、そのもしもが夏の蚊のように寄って来る。すると。

「ね、ねぇ、篠宮さん」

第33話

グルグルと思考を巡らしていたところで、聞きたくなかった声がした。おずおずとしたその声は蚊の羽音とは程遠かったが、どうして今この声を聴かないといけないのだ。

わたしは振り返って、それからニコりと作り笑いを浮かべた。

「どうしたの、桐原君？　あ、でも、わたしこれから図書室に行かなきゃいけないの。放課後も用事があるし。ゴメンね。また今度の機会じゃ駄目かな？」

わたしと桐原君が現在微妙な関係になっていることを知っているのはクラスの中でもほとんどいない。勘付いているのはしよりくらいだろうか。どこで誰が見ているのか分からない。

桐原君はわたしの笑顔を見てわたしに哀しみの眼差しを向けてくる。夢の中では何度も見た顔。表情は崩さなかったものの、わたしは苛立ちを覚えた。彼はわたしを憐れんでいるかのような顔でわたしをじっと見つめていた。

「……今がいい。時間はかからないから」

「ホント忙しいから明日以降にして」

桐原君は手を頬に当てて一瞬迷った仕草をした。ただ、それは一瞬だけだった。

「嫌だ。先延ばしにしたくない。あの時から随分経ったけど、ようやく決心がついたんだ。篠宮さんのためにも」
「勝手に決めつけないで」
「そうだけど……。でも篠宮さんはこのままでいいの？」
「別に」
「嘘つかないで」
「嘘じゃない」
　とっさにわたしは嘘をつく。
「だいたい、このことは桐原君には関係ないでしょ」
「関係あるないの問題な訳？　人が心配しているのに」
　桐原君がもっともらしいことを言ってきて、わたしはじろりと睨み付ける。心配してくれているのは疑わないが、わたしは別に他の人の心配なんて求めていない。それなのにわたしを心配してくる桐原君は邪魔臭かった。
「相手を間違えてるわね」
「そんなことない」
「それはわたしがムサ苦しいバリバリの運動部男子だったとしても言える？　心配しているのはわたしが女だからじゃないの？」

「まさか」
　口では否定するが、桐原君は言いよどんだ。いい気味だとばかりにわたしはふんっと鼻を鳴らした。
「ほらね。結局わたしがオスの異性だからでしょ。色じゃない。そういうところ男っぽいよね。桐原君も。シャツ越しの胸とかミニスカートから見えそうで見えない下着に欲情してる」
　桐原君の顔がカッと赤くなる。挑発で簡単に怒り出すのが可笑しくてわたしは内心せせら笑った。
「どうせ階段上がってる女子とがジロジロ見てんでしょ。前から薄々気付いてたよ。桐原君がそういう人だって」
「勝手決めつけるなっ!!　それに、ぼくがどんな人であろうと今の話に全然関係ないじゃないか」
「関係ない!?　大ありでしょ。そんな人からの助けなんてお断りよ」
「ふうん……。なら、他の人ならいいんだ」

第34話

桐原君が嫌味たっぷりに言ってきてわたしはじろりと睨み付けた。
「どういう意味？」
「よもや浅野さんからの助けは拒絶してるなんてことはないんだね。篠宮さん、浅野さんと仲良いしね」
『辛くてどうしようもなくなったらあたしにも言って。力になるから』
あの時、わたしは嬉しいとも思っていなかった。ただただ、親友にさえ助けを求められない自分が恥ずかしくて、恥ずかしくて……。
桐原君はしよりがわたしのことを心配していることを知っている。勿論わたしがそのことに気付いていることも。その上で桐原君はニッコリと笑った。
「良かった、浅野さんがいてくれて。1人で抱え込んでたらどうしようかと思っ……」
「五月蠅いっ!!」
わたしは思わず声を張り上げてしまう。偶然通りかかった男子生徒が物珍しそうにわたし達を見ていく。サーカスの動物にされた気分だった。一刻も早く終わらせて、ここから立ち去りたい。

「とにかく！　桐原君の助けなんかいらない。そもそも桐原君には関係ないでしょ。この話はこれでおしまい。これ以上こんな無駄なことに時間を割きたくないの。帰るからね」
「そんなの認めない！」
「どうして！」
　わたしはしまったと顔をしかめる。ここは廊下。それに一度ではなく二度も大きな声を出してしまった。声の残滓が細長い廊下を抜けていき、わたしの体温がひんやりと冷えていく。
「どうして。わたしには話して欲しいことも、知りたいこともない！」
「ぼくにはある。篠宮さんだって聞いた方がいいんだ」
「その必要はない!!」
「ある!!」
　遠くで他の生徒がざわめいている声が聞こえてくる。すでにギャラリーがいる。この後もどんどん増えていくだろう。早く片付けないと。じゃないと、じゃないと……。
　だけど、お互い感情が高ぶっている。わたしもあの時見たいに自分を制御出来ないでいる。上手く思考が回らない。
「ないって言ってるでしょっ!!　何なの。わたしの意思を無視してまで言いたい訳？

わたしの気持ちが分かるとでも言いたい訳!?　馬鹿にしないでっ！　桐原君なんかに何が分かるの？　どこまで分かるの？　わたしのことなんか知り尽くしてないくせにっ　!!」

わたしの声で周りは一層ざわざわとする。きっと止めに入った方がいいのかと言い合っているのだろう。……苦しい。体中が締め付けられる。耳の中で喚声が沸き起こる。屈辱。悔しい。それでも口は止まらない。

なんて人間は愚かなのだろう。目先のことには実感が湧くのに、遠くのことになるとまるで実感がない。

第35話

桐原君はひるみ、言葉を返せないでいる。チャンスだとわたしは思った。このまま畳み掛ければ、わたしはこの場を立ち去ることが出来る。桐原君ももうわたしに話しかけたりしなくなるかもしれない。勿論、それで丸くはならない。桐原君との関係は、はたから見ても分かるくらいに険悪になる。それくらいわたしも分かっていた。

それでも、わたしは聞きたくなかった。分かってないのに路上に捨てられた犬や猫に手を差し伸べるような言葉を言おうとして。そんなの聞きたくない。聞いてしまったらきっとわたしは世間とか大衆とかに闇の中へと放り込まれて、怖くて、闇の中に独りぼっちになることが、外の世界に出ることが怖くなって、わたしは一歩も動けなくなってしまう。

「……邪魔なの。帰って。今のわたしは桐原君に用はないの。桐原君なんかいらない。帰って！　帰ってよっ!!」

わたしはわめき声を上げる。すると、わたしはどこからともなく肩を掴まれた。

「ちょっと!?　どうしたの?」

掴んできたのは同じクラスの女の子。

「たまたま通りかかったら誰か喧嘩してる声が聞こえてきて、何なのかなって思ったら……。ねぇ、何かあったの、夕佳ちゃん？」

わたしは目を合わせないようにうつむく。その心配そうな口調から悪気はないのだろうけど、その言葉がわたしを余計苦しめた。息が詰まりそうになって、「なんでもない」と言うのが精一杯だった。

「何でもない訳ないでしょ。桐原君、何があったの？」

わたしに聞いても答えが返って来ないことを理解したのか、今度は桐原君に尋ねた。うつむいたままのわたしには桐原君がどんな表情をしているのか見えなかった。

「そ、それは・・・・」

「だから、何でもないの！　桐原君が何かした訳でもわたしが何かした訳でもないの。何もなかったし、何も起こってなんかないっ!!」

その場を切り裂くような叫び声が轟いた。一瞬誰の声かと思ったが、それは間違いなくわたしの声だった。一気に空気が冷え込む。

はっと気付いて顔を上げると、周りの人が取り囲むように一斉にわたしを見ていた。

見ている。見られている。驚いた顔をしてわたしを見ている。たくさんの人にわたしは見られている……。

もうやめて。わたしを見ないで。『あの教室にいるのが君なんじゃないの？』って顔

をしないで。

分かってる。自分が猫を被った嘘つきなことくらい……。

だから、これ以上わたしを見ないでっ!!

わたしは拘束具のように肩を掴んでいた女の子の手を無理矢理剥がした。その時、昼休みを終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。授業よりも見せ物を優先させる訳にもいかず、周りを取り囲んでいたギャラリーはワラワラと教室に消えていった。残ったのはわたしと桐原君と肩を掴んできた女の子。移動教室で急ぐ生徒が早歩きで通り過ぎた。

「篠宮さん。あのさ……」

「何？　さっさといなくなって、て言ったでしょ？」

わたしは桐原君を睨みつけた。桐原君が控えめな口調だった一方でわたしのは刺だらけだった。桐原君は目を合わせないように少し目線をずらしてしばらく突っ立っていたが、やがてわたしに背を向けて歩き出した。桐原君は最後まで何か言いたげな顔をしていた。

第36話

「……いくら喧嘩してた相手でも、さすがに言い過ぎだったんじゃ……」
　わたしは彼女に顔を見られたくなかった。自然とそっぽを向く。
「うん……そう、かもね……」
「そうだよ。ねぇ、そろそろ戻らないと。授業始っちゃうよ」
「うん。うん……。ごめん、わたし保健室行く。気分が悪くなったって言っといて」
　自分で言っておきながら、ひどい理由だと思う。体調不良って……。頭？　お腹？　本当に体調が良くないなら頭でもお腹でも押さえているだろうに。でも、そんなことを考えていると実際にお腹が痛い気がしてきた。嫌な痛み。嫌なわたし。
「うん。分かった。言っておく」
「ありがとう……。後、ここでのこと誰にも言わないでくれるかな」
「誰にも？」
「誰にも！」
　命令するような言い方だった。それにも関わらず、彼女は迷いなく小さく頷いてくれた。余計に罪悪感がのしかかる。

「じゃあ、先行ってるからね」

そう言うと彼女は駆け足気味に教室へと戻って行った。お腹の痛みは収まらない。おまけに吐き気もする。窓の向こうではポツポツと雨が降り出していた。これはしばらく止みそうもない。わたしはお腹を押さえながらそんなことを思っていた。

・　・　・

この学校に入学してもう1年が過ぎていた。1年の時、わたしと桐原君は普通のクラスメイトだった。少なくても桐原君はそう思っていたはず。特別な友達でもましてや恋人でもない。そこにいれば話したりする程度の仲であった。あの頃のわたしと桐原君の関係は今では想像も出来ないくらい穏やかなものだった。1年前のわたしは上手くみんなと同じように振る舞えたし、そもそもわたしが自分自身のことを分かってなかった。

中学校の卒業アルバムをズタズタに切り刻んだのは、入学当初からの高校での友達関係に腐心していたおかげで順調になり出した頃で、たしか2学期が始まってすぐの時期だったと記憶している。

わたしは、わたしが嫌いになった。自分自身がどうしようもないやつだと思うようになった。なのに、周りはわたしに話しかけてくる。それがわたしにとっては重荷だった。

そんな折、ある出来事が起きた。それはずっと続いていた桐原君との関係の分岐点だった。どちらを選んでも今まで通りの関係には戻れない。ただ、一方を選べば自分がしがらみから解放される可能性はあった。

けれど、わたしはその可能生を信じられなかった。そのことに後悔はなかった。なんせ、わたしにはどちらが正しかったのか分からないのだ。分からないなら後悔のしようもない。

わたしは時々考えてしまう。あの時の選択は本当に正しかったのか、あっちを選べばわたしは楽になれたのか、と。

思い返せばもう1ヶ月前、ことの始まりは桐原君が他のクラスの子と話していたたわいもない会話だった。

第37話

あの日の昼休み、わたしは自分の席に座って次の授業の準備にと教科書を机から出していた。すると、桐原君の声が耳に入ってきた。

「……で、篠宮さんがいつもと違ってたんだよ」

「へぇ、どんな風に？」

桐原君の傍にいた男子はおもしろがって聞き入っていた。

「うぅんと、目が合うと嫌そうな顔をするんだ。まずそこからしておかしいでしょ。それに自分はぼくとは違うから一緒にはいられないって」

「あれ？　篠宮ってそんなやつだったか？」

「そっくりさんならそんなことしても別に可笑しくはないけど。たしかに変な話だよな」

周りの男子は笑い出した。笑い声にわたしの動作が停止した。そして知っていることへの怒りと恐怖が込み上げてきた。桐原君がどうして知っているのか分からなかった。それがわたしをエスカレートさせた。体中を沸騰させるような怒りと一瞬で凍らせるような恐怖がごっちゃになって、それと一緒に自分が何を思っているのかもごっ

ちゃになって、思わずわたしは立ち上がってしまった。
「ちょっと！　何おかしなこと話してるのっ!!」
ものすごく大きな声だったせいか、クラスの人が一斉にこちらを見た。話をしていた男子は驚いた顔をしていた。何よりも桐原君が一番驚いているようで目を丸くしていた。
「あ、わ……ごめん。少し寝ぼけてたみたい……」
わたしが恥ずかしそうに言うとクラス中が再び笑い声で満たされた。
「もう、しっかりしてよ～」
話を聞いてなかった女子もケラケラと笑い出した。わたしも一緒に笑うが、心の中では惨めさと張り裂けそうな気持ちをぐっと表に出さないように押し込んでいた。
その後の授業は全く集中出来なかった。放課後、ついに耐えきれなくなって、わたしは帰ろうとする桐原君を捕まえて屋上へと繋がる階段に連れ出した。わたしは掴んだままだった桐原君の腕を突き放して睨みつけた。
「何で知ってるの？　あんなこと、誰も知らないはずなのに」
「何のこと？」
「とぼけないで！　昼休みに話してたでしょ。ねぇ、どうして知ってるの？　学校ではあんな姿一度とだってしたことないのに。もしかして、わたしの帰り道でもつけたの？

それしか考えられない。たしかにそれは盲点だったわ。わたしの不注意ね。でも、だからといって人前で軽々しく話していい訳ないでしょ。ただでさえ、1人にだって知られるの嫌だったのに、広められるなんて最悪。どう責任をとってくれるの？」

「だから、何のこと？」

桐原君は分かってないような顔をした。それが無性にカチンときた。わたしは無意識に自分の手を強く握った。

「まだとぼける訳？　一発殴った方がいい？　分かってないね。わたしは本当に怒っているの」

「ぼくはただ昨日の夜に見た夢の話をしてただけなんだけど……」

夢、と言われてふとわたしは昨日の夢に何故か桐原君が出て来たことを思い出した。でも、そんなの単なる偶然にすぎないと思った。

「へぇ、まだ嘘をつくんだ。夢ってどんな？」

「森の中にいて、ぼくが歩き回っていると偶然君と出くわした夢」

桐原君が話した夢はわたしのと瓜二つだった。けれど、今朝登校中にしょりに見た夢の話をした気がする。それをどこかで盗み聞きでもしたのだろう。わたしはそう決めつけた。

「それで？　そこには人間の姿をした黒い影に襲われてたわたしがいたんだって続ける

んでしょ？」

わたしがせせら笑うと突然桐原君が固まり、表情が抜け落ちた。盗み聞きしたのはそっちなのに、元々混乱していたのが更に深まった様子だった。

「……どうして、ぼくの夢の内容を知ってる。そこまではまだ誰にも話してないのに」

「それはこっちの台詞。どこでわたしが見た夢のことを知ったの」

「違う、ぼくの夢だ」

「えっ？」

わたしは驚きのあまり絶句した。冷静に思い出せば、さすがにしよりにもそこまでは詳しく話さなかった。誰かを頼ろうとせず、拒絶すらする。まして仲間なんか作ろうとしない。そんな自分、誰かに話せるはずがなかった。

わたしと同じ夢を見ている。信じがたかったが信じるしかなかった。桐原君にはわたしの夢を知る機会はないし、驚き具合から嘘を言っているようにも見えなかった。かといって、夢をはっきりと覚えているのだからわたしの勘違いでもなかった。

その後わたしは桐原君に色々なことを言ったが、気が動転してよく覚えていない。誰にも言うなとか、これ以上わたしに近付くなとか言った気がする。桐原君はそれを黙って聞いていた。かける言葉が思いつかなかったのもあるかもしれないが、それ以上にわたしが桐原君に話す機会を与えないくらいに喋り続けた。

「とにかくっ!!　わたしはここにいる！　夢に出てきたのは篠宮夕佳じゃない。そんなこと言わせないし、言ったら許さないっ!!　いいね？」

それを最後にわたしは返事を待たずに階段を後にした。最後に見えたのは心配そうにわたしを見つめている桐原君の顔。

でも、仕方がなかったんだ。あの時も今日もこうするしかなかったんだ。

だって、桐原君なんかに分かるはずがない。分かってないのに慰められるのはもっと辛いこと。だから、仕方がない。

みんな、分からないよ。分かってくれる訳ないもん。分からない。分からない……。

第38話

授業一つで４５分。それが３つで１３５分。休み時間も入れれば２時間半ってとこ？　映画１本が見られる時間をわたしは保健室で過ごした。先生は心配そうな顔でどこが悪いのとしつこく尋ねてきた。お腹が痛いと言っても具体的にどんな風になのか、お腹が痛くなった理由になりそうなものがないのか知りたかったらしい。わたしは適当に答えてベッドで横になり毛布にくるまっていた。結局、本当のことを言わないままクラスの保健委員が持ってきてくれた鞄を持って保健室を出て来た。絵の下書きも終わってないのに……。はぁぁっとため息をつく。

目の前にはトイレの白い個室の扉。焦点がきっちり定まらない目でわたしはそれを眺める。当然だが、トビラはずっと白い。何もせずただそこに白いままあった。

お腹の痛みは収まらない。そうでもなければここにはこなかったのだが、自分の嫌な部分も吐瀉物として吐き出せる訳でもない。壁に寄り掛かると頭がゴツンとぶつかった。

雨音が聞こえてくる。今頃アスファルトの道路は水たまりだらけだろう。雨ですっかり気温が下がり、丈の短いスカートとハイソックスではどうしようもないむき出しの

脚が夏前とはいえ寒さに悲鳴を上げていた。

しよりはどうしてるんだろう……。わたしは頭の片隅で思った。放課後にクレープ食べに行くはずだったのに。終礼もとっくに終わっている。

携帯を見れば何かメッセージが入っているかもしれない。例えば、『今どこにいるの？』とか『先行って待ってるからね』とか。ただ、どうであれ今のわたしには一緒に食べに行く気も、行く気力もなかった。

今日は、帰ろう……。しよりに体調が急に悪くなったから先に帰らせてとでも送っておかないと……。

わたしは鞄から携帯を取り出す。しかし、画面を明るくしようとしたところで止まった。しより達から何かメッセージが入っているのかと思うと、スイッチが押せなかった。

電車に乗って一息ついてからでもいっか……。

わたしは自分に言い聞かせ、携帯を鞄にもう一度しまうとのろのろとトイレのトビラを開けた。トイレには誰もおらず閑散としていた。

小窓から降り続く雨が見える。この時になってわたしは教室に傘を忘れていたことに気が付いた。わたしは歩く気になれない自分を鞭打つ。自然とうつむきがちになってしまう。

雨のせいで運動部が室内練習をしていた。そのガヤガヤとした声が隔てられたその先にあるように聞こえてくる。もう慣れたけど……。時々こういう感覚になるのだ。周りに見えるもの、聞こえてくるものが全部自分とは別世界にあるように思えてくる感覚。例えば、教室でわたしに向かってのはずなのに、わたしじゃなくて別の誰かに話しかけているみたいに聞こえてくる。そういった時はわたしが仕方がなく代わりに反応しているみたいに思えて仕方がない。

わたしは階段を1段づつ上がる。遅刻ギリギリの時は階段なんて1段飛ばしで上がれるのに。いつもよりも足が重く、それに階段も長かった。

「えっ？　マジで？」

踊り場来た所で自分の教室から声がすることに気付いた。とっさに足が止まる。

第39話

「うん、……みに……で桐…君と」
「でもめずら……よね。夕佳ちゃ……るな…て」
「…ント。いっつもニコ……してる……。おこ……あるんだ」
わたしの教室は階段のすぐ真横にある。途切れ途切れしか聞こえないが昼休みのことを話しているのは確かだった。あの子がクラス中に吹聴したのは分からない。ただあの子の声は今のところしない。勿論わたしが保健室にいる間に言う機会なんていくらでもあったけど。
傘を取らないといけないのに……。どうしようかと思っていると教室の中の1人の女の子が声を上げた。
「ねぇ、…当はた…の……ったりして」
冷たい素手で心臓を握られた気分がした。今、わたしについて、何て言った?
一拍空いた後、教室はどっと湧いた。
「まさか〜。そ…なのないない」
「そうだよ。ってか、最近いろ…なのに影響受け過ぎ…よ」

「え～、そん…に影響され…る？」
　雨の音でよく聞こえない。わたしは注意深く耳を傾けつつ、階段を1段上がった。
「思いっきり。だっ…、それって……と同じ……」
「そう…う」
「いや、で…待ってよ。なくは……でしょ？　だ…て、一見……に見え……ど、案外……ったりす…し」
　わたしについて語るその声はどこか楽しそうだった。階段をもう1段上がる。
「あー。も…かし…ら、そ…もあるか…」
「もう。冗…に乗っ……だめだ…」
「でもあんな…んなに見……るよ…な……で言い争ってる…だよ。そ…としか考え……ないでしょ」
「ないない。…けど、そ…が本当…ったら、おも…ろいよね」
「でしょ？」
　楽しそうに弾んだ声が矢になってわたしに突き刺さる。おもしろい？　何が？　わたしが？
　正直、何の話なのか、何を言っているのかはっきりとした形では掴めていなかった。けれどこの時には既に平常心を失っていた。わたしの耳にはわたしのことを冷笑して

いるように聞こえた。わたしの耳に届くのは頭の中で勝手に作り出された声だった。
夕佳ちゃんってそういう人だったんだ。
ねえ。がっかりだよね。笑っちゃうよね。
お願い。そうじゃないって言って。わたしは必死に耳を澄ます。
わたしは階段に独りだった。わたしは孤独と恐怖に支配される。……怖い。みんなが何を言うのか知りたくない。それでも聞かないと。わたしはもう1段上がり階段を上がりきる。脚はガクガクと震えていた。
……雨のせいだ。雨で冷え込んだせいだ。雨なんか嫌いだ。傘を取りにいかないと行けなくなるし、それに雨音が五月蝿い。五月蝿くて聞こえない。
「じゃ…、しよりはどう思…」
「そ…だよ。…しか、…じ中学だ……よね?」
しよりの名前を聞いてわたしは一瞬驚く。今までしよりの声は聞こえて来なかった。しよりはいない。いちゃいけない。でも期待は裏切られ、子供らしさが少し残った高めの声が聞こえてきた。
「まぁ、2年の時し…か同……ラスには…らな…ったけど」
その声はどこかけだる気で、応えるのが実に億劫そうだった。
いや、違う。ただの空耳だ。しよりが本当に教室にいるとは限らない。もっと近付か

ないと誰がいるのか、何を話しているのか確かめないと。わたしはそっと、扉越しに教室の中を覗き込んだ。

第40話

教室の窓側に女子達が円になって集まっていた。ある子は椅子に座り、ある子は立っていた。みんな放課後一緒にクレープを食べに行くはずだったメンバーだった。昼休みに止めに入ったあの子はいなかった。でもしよりはいた。窓を背にし、椅子に横向きで座っている。

同じクラスにもなったけど、夕佳とは形だけ。友達なんかじゃないってば。頭の中からそんなしよりの声が聞こえてくる。

……まさか。中学のときからずっと一緒にいてくたんだから。しよりはそんなことを言ったりしない。思ってもいない。大丈夫、大丈夫……。わたしは必死に不安を振り払おうとする。が、考えれば考える程不安が膨らんだ。

もし、違っていたら……。信じてもいいんだって思っていたのはわたしだけだったら……。

「へぇ、そうなんだ」

「ねぇ、じゃあしよりはどう思う?」

周りの女子の視線がしより一点に集まる。けれど、しよりの視線は周りのどの子にも

向いていなかった。口が半開きのまま見ているのは女子の間をすり抜けてその先の……。

あ、マズい。わたしの左足が反射的に一歩下がる。

しよりと、目が合っちゃった……。

しよりはわたしをじっと見つめながら立ち上がり、わたしの方へ片足を前に出した。

その瞬間、押さえつけていた恐怖心が一気に弾けた。しよりがこっちに来る。

頭が真っ白になった。

『ねぇ、じゃあしよりはどう思う？』

同じクラスにもなったけど、夕佳とは形だけ。

『ねぇ、じゃあしよりはどう思う？』

友達なんかじゃないってば。

『ねぇ、じゃあしよりはどう思う？』

来ないで。聞きたくない。知りたくないものを知ってしまうかもしれないなら、わたしは何も聞きたくない。

もう自分がどこにいるのかも分からなくなって、気が付いたら階段を駆け下りていた。遠くで微かに勢いよく教室の扉が開けられる音としよりがわたしの名前を呼んでいるのが聞こえたがわたしはかまわず走り続けた。その勢いのまま昇降口に進入する。

下駄箱の前には先に1人いて、急にわたしがやって来た音でビクッと肩を震わせた。桐原君だった。

「っ！　て、篠宮さん……？　ど……」

「邪魔！　どいてっ！」

桐原君を突き飛ばし、上履きを放り込んでわたしは雨の振る昇降口の外へそのまま飛び出した。

みんなどうして教室に残ってたんだろう。桐原君だって真っ直ぐ帰るならもっと早く学校を出ているはず。わたしを待ってたから？　わたしのことを気にして？　そんなありえなくもない話がちらつき、胸がズキリと痛んだ。

第41話

雨の止む気配はない。外に出た途端、雨が容赦なくわたしに襲いかかってきた。鞄も制服もどんどん水分をためていき、走って逃げようとするわたしを邪魔する。

足元がおぼつかない。時折転びそうになりながら、歩道に出来た水たまりをローファーで踏みつけて駅から学校へと続く通学路を逆戻りする。飛び跳ねた水滴が脚に当たった。体温の奪われた脚でもそれは冷たく感じた。

灰色のコンクリートの地面だけが視界を流れていく。学校を出てから一体何人の人を抜いたのだろう。抜かれた人達はどんな顔でわたしを見ていたのだろう。そんなの、知りたくもなかった。途中耳元でクラクションの音がした。おそらく赤信号を無視したのだろう。ならば、そのままわたしを轢いてくれたも良かったのに。

国道を走り、いくつかの橋と信号を渡り……やがて、駅に辿り着いた。

ずっと走り続けて息が犬のようだ。走るのを止めた途端両手を膝の上に置かずにはいられなかった。

駅前にはタクシー乗り場やバスターミナルがあり、傘を手にしたいろんな人がせわしく現れては消えていった。その中わたしは1人立ち止まっている。

みんなみんな、誰かと傘を並ばせて歩いているように見えた。誰かと傘を分け合いっこしているように見えた。

バスが止まって、降りてきた人が駅の改札の中へと吸い込まれていく。バス停のすぐ傍のクレープ屋は雨のせいで並んでいる様子はなかった。

ポタポタと制服から水滴が落ちる。一刻も早くここを立ち去りかった。今のわたしを見られたくない。わたしは駅とは反対の方向へ歩き出す。こんなに濡れたまま電車に乗ったら周りの人の迷惑にもなる。その言葉が周りの人のためではなく、自分のためであることは分かっていた。けれどそう思うことで気分が少し楽になった。

脚を前に出す度に濡れたスカートがくっつき、何とも気持ち悪かった。雨がコンクリートを打つ音はノイズになってわたしの骨を響かせ耳の感覚を麻痺させていく。思考が止まったまま右に曲がり、左に曲がり、鉱山の最奥部を目指す様に彷徨い歩き、わたしはどこかの十字路の真ん中で見覚えのない世界を見渡していた。

似た形の家が何軒も建ち並んでいる。この雨の中で外を出歩く人はおらず、家々のベランダは洗濯物が中に取り込まれて閑散としていた。

遠くで宅急便の車がエンジン音を立ててどこかへと走り出す。それ以外車の気配もなかった。車が止まっていないまま車道の信号が青になる。

ふと、わたしは目の前の黄色い棒に目が止まった。目線を挙げて見ると、それはカー

ブミラーだった。そして雨の雫のついた鏡の向こう側に1人立っているわたしがいた。
「……わたし、今こんな顔してるんだ……」
どこで間違えたんだろう。どうすれば良かったんだろう……。
本当は桐原君の言葉もしよりの言葉も聞かないといけなかった。頭では分かっているのに、実行が伴わない。そんな自分にならないためにはどうすれば良かったのだろうか。
雨は止む気配がしない。学校の上にもまだ雨雲はあるのだろう。
そう思って、わたしは思い出して鞄から携帯を取り出した。まだしよりに連絡をしていない。さすがにマズい。本当に嫌われてしまう。わたしは電源を入れた。案の定しよりからの通知が1つ入っていた。
どんな内容かビクビクしながらわたしはメールの文面に目を落とす。が、それはわたしを心配する内容だった。
水滴が頬を流れ落ちた。そっと頬を触れるとその手はびっくりするくらいに冷たかった。
みんな分かってくれないと思っていた。でも本当はただ分かって欲しくないだけだった。そう思っているわたしに気付きたくなくて、分かってくれないと思い込もうとしていただけだった。

どうして桐原君もしよりも、わたしのこと嫌いにならないの？　知っちゃったのに、気付いていてしまったのに、どうして一緒にいようとするの？

なのに、どうして……。

「分からない……もう、分からないよ……」

水分を含んだ髪がずしりと重い。鞄を持った手はダランと下がり、足取りはふらついていた。行く先なんて自分でも分からなかった。ただ、どの道も、学校にも家にも何処にも繋がっていない。そんな気がした。